司背例譴責狀文同院播磨國瀧野莊申以播磨刊行補摠官利明宿祢卒去替文并同莊進年料諚定米百五石文同院丹波國諸莊司等申國司背先例付課雜事三箇條文（為被問守経國朝臣被留）

按スルニ、總官ハ、莊園ヲ主ル吏ナリ、

〔高野山御參詣記〕永承三年十月十一日、遅明於淀渡還御々船、（○中畧副船三艘、已上廿一艘、撿非違使右衛門志村主重基奉仰、仰淀山崎刀祢散所等令造板屋形、前日遣藏人所所司内藏允藤原良任與重基相共令分充件船、以掠橋御莊夫卅人、攝津大江御厨夫卅人分給水手等桂鵜飼廿艘、宇治鵜飼十四艘、依召候御供、始白□船普文配船々令勤役送、以近江国司所進白米卅斛分充僧供料并免道間雜用）

〔範國記〕長元九年十二月廿二日、被下後院宣旨先被奏度文殿下以余所令奏給也、其狀云、

後一條院、

奉度御領所等事、

朱雀院、

冷泉院、

石原院、

五條院、

福地御牧、

會賀御莊、

神崎御莊、

庶忍御莊、

右奉度如件、

年号、

別當民部卿源朝臣

内藏頭兼美作守大江朝臣、

依無判官代不注署所、

〔類聚三代格七〕太政官符、（○中畧）右伊勢國司解偁、當土之民浮宕

ガラス使用

古事類苑稿

東京圖書館

部内（○中略）被駈王臣之莊、徒免課役之務、（○中略）寶亀十一年十月廿六日、

類聚國史（八十三嵯峨）弘仁十三年十二月甲寅、中納言従三位行春宮大夫左衛門督陸奥出羽按察使良岑朝臣安世上疏曰云云、又河内國諸家莊園往々而在、土人數少、京戸過多、伏望不論京戸土人、營田一町者出挙正税卅束云云、許之、

類聚三代格（十二）太政官符

應禁断諸院諸宮王臣家假民私宅号莊家貯積稲穀等物事

右諸院諸宮王臣家、於諸國部内、或本有田地、自立莊家、或新占山野、收其地利、曰此等一事、各求便宜、借民（私）宅、積聚稲穀等物、号稱莊家、好妨官物、國史之力不敢制止、出挙收納不能自由、公事難濟、職此之由、去天平九年九月廿一日、及天平勝寶三年九月四日兩度格云、臣家之物貯蓄諸國、自今以後、宜皆禁断、若有犯

古事類苑稿

東京圖書館

者科違勅罪、其物没官、國司郡司即解見任者、左大臣宣、奉勅、先後格旨禁制嚴峻、諸國牧宰無有履行、宜重下知勿使更然、仍須假号莊家為國致妨者、科違勅罪、物皆没官、其稱使及莊撿校専當預等放縱不遜、以妨國務者、不論蔭贖、決杖六十、但元来實為莊家、不妨國務者、不在制限、

延喜二年三月十三日、

按スルニ、使ト云ヒ、莊撿校ト云ヒ、莊専當ト云ヒ、莊預ト云フハ、皆莊司ナリ、而シテ使ハ、即チ田使ニテ田領ナリ、

中右記天永二年八月廿九日、依有陣定催參内、右大將新中納言左大辨參仕、鴨社與大覚寺所領播万國莊相論事也、大略依官使中旨、今一度可被問本寺欤、公卿人數少之上、沙汰未切事也、仍延引、

九月三日、莊園記録所上卿并可被置事被仰歸

ガラス使用

東京圖書館

家之後、以書狀申殿下了、屆（天）不能重參也、　九日、入夜藏人辨雅兼來仰云、莊園記錄所上卿可奉行、辨雅兼、大外記師遠、大夫史盛仲、明法博士信貞可為寄人之便仰左少辨了、是依延久例被仰下者、但件事國司與本家相論之時、可撿知云云、不申上者、強不及沙汰歟、　十月五日、今日莊園記錄所事始也、以太政官朝所為其所、午刻許人〻參入、座二行、（西座辨上官、辨半東座寄人五位以下、諸司）兼居膳、三獻了、被下文書中、九條前太政大臣家與右京權大夫家俊朝臣相論文書等、大略勘始、參仕人大夫史盛仲、六位史友貞、大外記師遠、明法博士信貞、勘解由次官行盛、藏人左少辨雅兼云云、餘寄人不參、予件上卿、然而上卿不參、彼所後聞所記置也、

〔同〕保安元年四月六日、申時許依催又參內、是依有仗議也、右大將別當左大臣參仕、人〻俄故障、是官問注賀茂上下御社司許、申彼領淡路生穗莊、為官使支兼國司目代國元等、被滅亡事、左大辨讀上問注記之後、被定申云、件事子細見調度文書、但官使與國目代、互雖遁申、共知沙汰者、皆知子細也、但國司在京之間、雖申不知之由、於官使并目代者、難遁申也、早下給法家、隨勘申、可被量行歟、人々同是詞、秉燭以前事了、退出、

件事元ハ、淡路國司申官使停止國中新立莊園之間、滅亡件賀茂御領穗莊也、但彼莊ハ、先年依每日供御、有宣旨被立也、而其後國司、移立他鄉也、而今度官使故新立由、推渡本鄉之（間）、投弃神寶、破損神殿也、二ケ度於官被決所、互雖申遁、又知意也、左大辨可被下法家申定申、皆以同之也、

以莊施寺

〔續日本紀〕（二十八稱德）神護景雲元年五月戊辰、先是左京人從八位上荒木臣道麻呂、及其男無位忍國、莊三區獻於西大寺、

〔多武峯緣起〕（田園）信濃國筑摩郡蘇我鄉字草茂莊一處、（田類等在施入）

東京圖書館

狀、

右大納言藤原冬緒卿、（濱成卿之曾孫）所奉施入、

〔多武峯略記 下〕第七田園

信濃國筑摩郡蘘我郷字草茂莊一處、（田類等在施入狀、）

右大納言藤原冬緒卿、（濱成卿之曾孫、）所奉施入、彼冬緒卿所領十市郡椋橋郷山林治田、與當寺相論、而間彼卿身受病患、久不平愈、令卜筮之處、聖廟御祟云云、仍以彼林田、永施入當寺、依為之少、以彼信濃國所領、相添奉施入之、委見于彼施入狀、其時座主延安、上座聖澄、寺主行澄、都維那寶叔也、聖廟靈德以之可知、仍為留男戸田四町二畝百七十歩、行其口代矣、

〔東大寺小攬文書〕東大寺越前國桑原莊劵、（雜文書、）

天平寶字元二、

越前國使等解申桑原莊所應堀開溝并度搋等事、

合叅處、

應損熟田壹町捌段、（并舊姓、）

用稻貳仟漆伯束、

單功壹仟伍伯人充功稻壹仟伍伯束、（人別充束、）

食料稻陸伯束、（人別充四把、）

一溝長一千二百文丈、（廣一丈二尺、深五尺、）

單功一千二百卌人、

一溝長三百丈、（廣六尺、深四尺、）

單功二百人、

一脩理守、美溝長二百十文、（廣五尺、深三尺五寸、）

單功七十人、

度搋貳拾肆口、（六口、長各五尺、廣各三尺、　六口、長各二丈五尺、横各三尺、）

二口、（長各一丈五尺、廣各三尺、）

ガラス使用

自始在樋十三口、（損破三口、見十口、）

今可置十四口、充價稻陸伯漆拾束、

六口、（長各五丈、度三尺、）直稻四百廿束、（日別充七十束、）

六口（長二丈五尺、廣三尺、）直稻二百十束、（口別充卅五束、）

二口（長各一丈五尺、廣三尺、）直稻卌束、（口別充廿束、）

以前雖本至溝在溝下田高以茲荒先開悉然不買伯姓上件開可吉田残野可開一二箇年於理商量小損多益望請寺家牒申送國府若有不許熟田者以寺家田相替於熟田仍具注狀附粟田人麿請處以解、

天平寶字元年十一月十二日、

坂井郡散仕阿刀僧、

足羽郡大領生江臣東人、

國史生安都宿祢　雄足、

〔同〕越中國諸郡莊園総劵第一、（國判造營寶字三年、）牒、

越中國撿定東大寺墾田地漆處、

捴地伍伯捌拾漆段壹拾捌歩、

開田壹伯伍拾肆町陸段肆拾陸□、

未開肆伯參拾參町柒伯柒拾貳歩、

礪波郡、

合伊加流伎野地壹伯町、（東山南利波臣志留志地、西故大原真人麿地、北□□並未開、）

射水郡、

合貳伯伍拾叅町陸段伯陸拾陸歩、

開田壹伯拾捌町壹段叅伯拾陸□、

未開壹伯叅拾伍町肆段貳伯拾歩、

以前去天平勝寶元年、占定野地、且墾開如件、

天平寶字三年十一月十四日、

ガラス使用

笇師散位正八位下小搞公石正、

（同）越中國諸郡莊園搃券第三、（國判景雲元年、）

越中國司解　申撿挍東大寺墾田并野地圖事、

合玖伯參拾肆町捌段壹伯壹拾捌歩、

以前撿挍東大寺墾田野地并圖、具件如前、仍具録状附、利波臣淨貞進上、謹解、

神護景雲元年十一月十六日

正七位上行目阿部小殿朝臣　（調使、）

（東大寺要録　六）一諸國諸莊田地、長徳四年注文定、新開發田并治開田、

藥園宮内田地十三町四段九十五歩、（在大和國添下郡、）

田十町三段百九十歩、

畠三町二百五十六歩、

凡上田九町五段百廿歩、

春日莊田二町三段百八十歩、

尾張國莊田五百八十三町二段百歩、

陵田治開田三町四段、（右平城京左一條二坊佐保里、）

（同　六）別功德分莊、

紀伊國、

那賀名草両郡十二町九段廿歩、（二月十六日、㝡勝王経料、）

那賀郡三宅莊田七町八段二百十六歩、

常荒河成四町二百十六歩、

同郡名陵村田三町七段八十歩、（内竪讀経料、）

同郡土崎村田十二町九段十四歩、

（中右記）嘉保元年八月廿八日、結政條依可有陣定、左大臣以下、公卿濟々參仕、有陣定、延暦寺申莊園事、

東京圖書館

寺無莊園

仁和寺諸堂記、轉輪院、奉為鳥羽院母后被造立、白川院御沙汰被造之、當時御室御進上也、當院無莊園、一向以諸國封戸被充寺用之間、上古者無懈怠、及于末代、諸國司皆對捍之、故全分無寺用、顛倒畢、御佛事者於法金剛院南御堂被行之、

傳領莊園

中右記、嘉承元年十一月十一日、先參殿下、（藤原忠実）人々申旨言上了、次參内、是且殿下御使也、故高倉一宮莊々、任宇治殿（藤原頼通）所分旨、可為家領之由、昨日成政所下文了由、可奏聞者、則於清涼殿北面御所、件旨委奏聞了、

殿暦、嘉承元年十一月十日、今日依吉日、故高倉宮莊園家政所下文皆悉令成、其詞云、可為家領者、家司時範朝臣承行、今日人々一兩来、有盃酒事、十二月四日、今夜故高倉宮家地莊薗、可為余領由、被下宣旨、

中右記、元永二年二月廿三日、早旦近江前司基俊来、談万事之次、相語之、在甲斐國、莊名大井、（本名布施）件莊相傳所知歟、而可奉此權守宗重女房也者、莊司菅野成兼也、件男近日行向播磨守基隆許云云、甚不安者也、又於拔並莊者、男女子孫之中、只以為宗人追可讓者、

台記、久安元年十月二日、詣宇治、問一條殿疾、有減云云、次參小松殿、去比自一條殿賜淡路莊、件莊年来為國司被停廢、而今雖召廳宣不奉之、汝得之乞取廳宣可領知、即自筆處分給之、仍乞取廳宣遣使已了、今日參入之次令申云、御堂無可寄之莊由、常令歎給、此淡路莊國司已與廳宣、可返上、件莊令寄御堂給可宜、被仰云、全不可有事也、件莊所出不幾、雖寄之不可足彼堂用途、所申雖忠切、無益事也者、

吾妻鏡四、文治元年二月十九日、熊野山領、參河國竹谷蒲形兩莊事、有其沙汰、當莊根本者、開發領主散位俊成奉寄彼山之間、

以莊付人

別當湛快令領掌之、讓附女子、始為行快僧都之妻、後嫁前薩摩守平忠度朝臣、忠度於一谷被誅戮之後、為沒官領、武衛令拜領給之地也、而領主女子令愍望于本夫行快云、早愁申子細於關東、可令安堵件兩莊、若然者可讓未来於行快子息云云、（女子腹）就此契約、行快僧都自熊野差進使者、（僧榮增）所言上也、謂行快者、行範一男、為六條廷尉禪門（為義）外孫、於源家其好已異他、仍本自重之處、此愁訴出来之間、無左右加下知給、且又御敬神之故也云云、

（十訓抄 十二）承平の比、平將門東國にて謀反おこしたりけるに、常陸掾平貞盛、下野押領使藤原秀郷等がうつてにむかひて、めされたりしとも、かれはおそかりければ、参議民部卿忠文を大將軍として、舎弟刑部少輔仲舒を副將軍としてくださされたるに、いまだくだりつかざるさきに、將門うたれにければ、道より帰参になりぬ、さて貞盛秀郷等に勧賞を行はれし時、忠文をも同じく賞あるべきよし申されければ、陣の定有けるに、小野宮殿は、一の座にて、うたがはしき事をばおこなはざれといふ文有とて、無沙汰にして有なんと申されけるに、九條殿は、次の座にて下着以前に、逆徒の亡るはさる事なれども、勅定につきて、むかふ、忠文いかでか捨られん、刑のうたがはしきは、行はざれ、賞のうたがはしきは、あたへよとこそいへと、曲禮の文を引て申されたれども、さきの議に付てやみになりぬ、しかれども、忠文その由を畏申て、冨家の領をば券契をそえて、九條殿に奉りにけり、それより代々伝えて一の人の御領なり、小野宮殿をば恨ありて、子孫絶失なんと誓はれけるとぞ、

〔中右記〕元永二年三月廿五日、巳時許從院有召、則馳參、召御前被仰云、上野國司有所申、近日関白家、（〇藤原忠実）此國中、有立莊事、是知信寄申也、件莊及五千町、齋院禊祭料江花、（〇江花恐宛字誤、宛充俗體、）彼莊地利也、仍不能辨濟者、此事如何、縦雖山川藪澤、一國之中及五千町、甚不便也、有便宜之時、以此旨可傳関白也、頗以不便者予申之、此事全不知候也、以仰旨可傳関白候、　廿六日、參殿下、申昨日院宣之處、御返事云、只如此莊薗以人寄為家領也、仍以知信申旨、一旦仰國司許也、於今者可停止也、凡大辨雜事、只不憚可被敎仰候也、次參院、有召參御前、委以奏了、午後退出、

〔同〕大治五年八月七日、今夕以少輔申大殿事、越中權守雅光、以新莊奉寄大殿也、而其間此新莊牢籠出来欤、仰云、一日所寄也、以知信可成政所下文之由、仰下了、然者其領可相分事欤、十一日、雅光来奉新莊坪付案文、此次談云、此莊ハ、土御門右大臣殿、為左衞門督時、源賴成為式部丞奉寄也、件寄文在雅光許、早可奉之由、所示也、早可給之由、答了、入夜新莊下司為遠申云、新莊ハ六十町也、此外新御領四十町、西念寺五十町、井田莊十餘町、瀨沼加納十餘町也、菓子林在新御領中也、新御領西念寺、井田莊ハ、皆外地子之所也、遣使被沙汰、何事候哉云云、仰云、如在廳官人貞村申、九十餘町之由、所注付也、仍新莊ハ九十餘町欤、廿五日、今朝遣元遠於新莊、初令撿知、廿九日、元遠從新莊歸来申、件莊子細、大略年来越中權守雅光所為不便欤、

〔同〕保延三年四月一日、甲斐鎌田莊、奉寄関白殿、付式部權大輔宗光本券案文、同進了、政所下文、申請也、

〔台記〕久安六年七月八日、今夕中宮自東三條入内、被行家賞、其母玄子（本生）叙從三位、（他叙人不注之、）戌刻許、禅閤賜鴨院地日置莊、

（加御書、）東寺百合古文書（百十七）讓与相傳之私領地新券文事、

合叄拾丈者、　但口叄丈、南北貳拾丈也、

在自七條南自拌毛東角也、

右件地、元者故公大夫散位紀朝臣正清之先祖相傳之私領也、而今依有要用於齋宮介紀季正、以永年出擧物代口貳丈伍尺南北拾丈、立新券文渡与畢、殘地於口伍尺南北拾丈者、後家之尼妙蓮重於齋宮介紀季正讓与畢、但於本券者、依有類地、不能副渡、仍為後日新立放券文之所、如件、

嘉應二年四月廿五日　賣人尼妙蓮

争莊園

（十訓抄）（八）六條修理大夫顯季卿あづまの方に知行の所有けり、館の三郎義光さまたげあらそひけり、大夫の理有けれバ、院に申給左右なくかれが妨をとゞめらるべしと思ハれけるに、とみに事きれざりけれバ、心もとなく思ハれけり、院に参て候ひけるに、閑なりける時近く召よせて、汝が訴申東国の荘の事、今までことぎれねバ、口惜とや思と仰られけれバ、畏て申うけ給り度くと云、さ給へバ、我理有よしをかのめのと申されたる状聞召て、申所ハいはれて然ども我思ハ彼をさりて汝にそうさよかしと、何ら事なれバ、思ひまでもあやしと思てそばより物を申さでゐられバ、顯季が身にハかしこまりとそ事ありて国もあり官もありいまだ此所いくバくならず、義光ハ彼に命懸たるよし申、彼がいとをしきたあらバ顯季がいとをしきにこそ、義光ハゑびすのやうなる心もなき者也、安からず思ハんまゝに、夜中にもあれ、大路通るにてもあれ、いかなるわざハひをせんと思立

れハそのみちがまめに、ゆゝしき大事にハあらねバ、かのもとそかくもなからんをはかる事にて心うく思しめしにいたるべき也、理に過るをもていはんにハ思ふにくものゝちめ我分て定めんにハ、とかくに沙汰に及ぬ程の事なれども、是ほど思て今まで事きらぬ也と、何事有けれバ、顕季畏悦て涙をおとして出にけり、家に行けるや遅きと義光を聞ゆべき事有とて、よびよせけれバ、人ゝハいかんとし刑部殿の何事によび給ぞと、いひあへりけるに参したれハ、出あひて彼荘の事申さんとて案内いはせ侍りけるに、なり、此事理のいたる所ハ申侍しかど、能ゝ思給ふれバ、我ハかれハ足なくても事かくまじき事なし、かゝこにハ是がうのことあれバ、実に便なり、此事申さんとて聞え侍るなりとて、去文を書てとらせられけれバ、義光畏て侍に立寄て書けるが、そこに二字書てまゐらせて出にけり、そのゝちつきゞしくひるなど参り侍る事ハなかりけれども、万の往来にハ何と聞えなん、思ひよらぬ人をもしらぬ時、鎧着たる者の五六人なとなむきびハなれの見えけれバ、たれぞとゝはせけれバ、其て刑部殿随兵に侍るといひて、いぶかしくぞ身をもちまゐりけり、是程聞けるをあしく思ハましかバと胸つぶれて、院の御恩忝く思ひしらるゝに付ても、賢くぞ去ある人なると申されけり、かゝる事を聞にも、昔のめでたき人ハ一旦のぞむべき事など有とも、恥を先立にして、其外をめぐらすべしと也、

〔中右記〕永久二年七月廿七日、故師兼宰相女訴申、所領為源滿房稱院宣被押妨事、仰云、件滿房文以内大臣所進申文也、仍下

東京圖書館

古事類苑稿

給早任理可沙汰也、

〔長秋記〕大治四年三月廿四日、自女院○（待賢院）女房中納言公承、次云、故右京大夫俊家深領女房一條殿尚執申少事也、可避申者令申承之由了、近日七道諸國門々戸々莊薗領地、彼院女房侍等、觸縁尋便、不謂理非、事由皆所々押領也、天下歎及千萬人、一身何為愁哉、

〔中右記〕長承二年五月八日、行向平等院、九日、此寺供僧義仁阿闍梨奉先祖信濃莊、被奪取他人、可申大殿（忠通）○（藤原）者、給申文可進之思、答了、

〔玉海〕壽永二年十月二日、或人云、頼朝所申之三箇條事、一平家家所押領之神社佛寺領地、如本可付本社本社之由、可被下宣旨、平氏滅亡、為佛神之加護之故也云云、

一院宮諸家領同平氏多以虜掠云々、是又如本返給本主、可被休人愁云々、

〔同〕壽永二年十月四日、大夫史隆職来、密々持来頼朝所進合戰注文并折紙等、院御使廳官所持參云々、件折紙不實、先日所聞然、而為後代注置畢、

一可被行勸賞於神社佛寺事、

右日本國者神國也、而頃年之間謀臣之輩、不立神社之領、不顧佛寺之領、押領之間遂依其咎、七月廿五日忽出洛城散之處所守諸王法之佛神所加冥顯之罰給也、全非頼朝微力之所及、然者可被行殊賞於神社佛寺、候近年佛聖燈油之用途已闕如、無先跡、寺領如元可付本所之由、早可被宣下候、

一諸院宮博陸以下領如元可被返付本所事、右王侯卿相御領平家一門押領數所、然間領家忘其沙汰、不能地忍、早降聖日之明詔、可拂愁雲之餘氣、攘災招福之計、何事如之哉、頼朝尚領彼

東京圖書館

ガラス使用

領等者、人之歎相同平家、候歟、宜任道理有御沙汰者、○中略以前三箇條事、一心所存如此、早以此趣可令計達給、仍注大概、上啓如件、合戰記不遑具注、

〔同〕壽永二年閏十月十三日、大夫史隆職來談世間事、○中略抑東海東山北陸三道之莊薗國領、如本可領知之由、可被宣下之旨、頼朝申請、仍被下宣旨之處、北陸道許依恐義仲、不被成其宣旨、頼朝之（聞）者、定結欝歟、太不便事也云々、

〔吾妻鏡 四〕文治元年八月十三日、久經國平等使者、自京都參著、帶院廳御下文、已以赴鎮西畢云々、持參彼御下文案、即所被預置俊兼也、其狀云、

院廳下 大宰府并管内諸在廳官人等、

可早任從二位源卿使中原久經藤原國平等下知、令停止武士妨諸國諸莊委附國司領家事、

右謀叛之輩、追討之後、諸國諸莊任舊國司領家、可知行之處、面々武士各々押領、不能成敗之依（由）、有其聞、國務莊家行莊務、永停新儀、可守先規之由、去六月成廳下文、相副源卿狀、著久經國平、所下遣也、早停止旁濫妨、云國衙、云莊薗、如元可令委附國司領家之狀、所仰如件、太宰府及以官内諸國在廳人等、宜承知、敢勿違失、故下、

元暦二年七月廿八日 主典代織部正兼皇后宮大屬、

大江朝臣判官宮内權少輔藤原朝臣、

別當大納言兼皇后宮大夫藤原朝臣、勘解由次官兼皇后宮權大進藤原朝臣、

民部卿藤原朝臣、 右少辨藤原朝臣、

權中納言藤原朝臣右衞門權佐兼皇后宮大進藤原、

ガラス使用

叅議讃岐權守平朝臣、　左少辨平朝臣、
大藏卿兼備後權守高階朝臣、
右大辨兼皇后宮亮藤原朝臣、
木工頭藤原朝臣、
右馬頭高階朝臣、

奪莊園所入

〔同　三〕元暦元年三月九日、去月十八日宣旨状到著鎌倉、是近日武士等、寄事於朝敵、追討於諸國莊園、打止乃貢、奪取人物、而彼輩募関東威、欵無左右難處罪科之由、公家内々有其沙汰云々、武衛依令傳聞之給、下官全不案煩庶民之計、其事早可被糺行之由、被申請之云〻、

壽永三年二月十八日　宣旨、

近年以降武士輩、不憚皇憲恣耀私威、成自由下知、廻諸國七道、或押黷神社之神税、或奪取佛寺之佛聖、況院宮諸司及人領。

哉、天譴遂露、民憂無空、自今以後、永被停止、敢莫更然、前事之存、後輩可愼、若於有由緒、散位源朝臣頼朝相訪子細、觸官言上、不遵行旨、猶令違犯者、專處罪科、不曾寛宥、

藏人頭左中辨兼皇后宮亮藤原光雅奉、

免課役

〔東大寺要録　六〕東大寺牒　當國衙、

欲被免除寺家香菜莊園司等防河夫役并臨時雜役狀、

添上郡五所、
和迩莊、大宅莊、中莊、櫟北莊、簀川莊、
添下郡二所、
松本莊、楊莊、
山邊郡、
布留莊、　菅田莊、　千代莊、
平群郡三所、御香薗、

ガラス使用

塡田莊、　河原莊、　池尻莊、

廣瀨郡、

小林莊、　小東莊、

城下郡二所、

中西莊、　田中莊、

十市郡、

千代莊、

牒件莊園司等愁狀偁、御寺建立以降、至于大佛御供、代々聖皇依本願之趣、以供御稻被割宛者、仍當國百姓不運御稻、已得息肩之便、御菜者昔國內道心之輩、随力所堪、吾以備進、其子孫、爲件莊園司供奉年久經部相分雜有其數、公民不幾、往代以後依免臨時雜役、雖無料物、所勤行也、而今當時國掌不免雜役、宛如平民、況乎又負課防河夫役切勘殊甚者、倩尋案內、防河夫役去年二月被下可免除之宣旨了、綸旨不輕、何有差宛乎、就中當時國掌脩良之聞普、及分憂之政無偏、黍園之愁何無判許、仍牒送如件、乞衙察之狀、早任宣旨停止、夫役幷被免臨時雜役、仍注事狀以牒、

寛弘七年八月廿二日、　權都維那法師行好、

都維那法師鴻助、

別當權少僧都澄心、

上座、

寺主大法師安鑒、

右諸莊々等、依古日記録而已、或御筆勅書莊、或御勅旨田、或御別官、或他領寄進、或後被寄進、或分供御、或募御威、如此寺也、其由委載各々公驗、不能委記、但近來多爲他捍妨、所殘數少、哀哉、不憚聖皇勅誓、恣致牢籠、殖苦種乎、

東京圖書館

ガラス使用

中右記嘉保二年七月十二日、午時許叅二大殿一、（世賀井也、○中畧）次被レ仰云、勝林院領芹生莊在二大原中□近日□□事一、所レ依レ召二炭棠一、其責之由所レ申也、件莊本是□道少將領施二入彼寺一之後、如レ此之公事、可二免除一之由、被レ下二度々宣旨一、任二宣旨一狀、可二免除一者、

百練抄崇德六永治元年八月四日、女御得子无品内親王暲子家申請上皇御處分莊々可レ免二國郡課役一事宣下、（女御家九箇所、内親王家十二箇所、）

榮花物語疑さてこれ御堂の事を思すに、ふかく御心に志ませ給へれど、日々におほくの人まいりて海のてならこむ、さるべき殿ばらをはじめたてまつりて、こゝやくの御庄どもより、一日に五六百人の夫を奉るに、かみおほやけの事をはかしこきことにおぼしめして、國々のかみども地子官物はおそなはれども、たゞいまは此御堂の夫や、く材木檜皮瓦をおほくまいらすることを、我もくときをひはらうまいる、

源氏物語須磨花ちる里も、かなしとおぼしたるまゝに、かきあつめ給へる御心ゝ、見給ふもをかしく、めなれぬ心ちして、いづれもうちみつゝなぐさめ給へど、つゐそのおもひのもよほしぐさなれあるを、あれまさる軒のしのぶをながめつゝしげくも露のかゝる袖かな、とあるを、げにむぐらより外のうしろみもなきさまにておはすらんと思しやりて、ながあめについぢ所々くづれてなんときゝ給へば、京のけいしの許に仰つかはして、ちかき國々の御莊のものなどもよほさせて、つかうまつるべきよしのたまはす、

台記久安四年八月廿四日、分配莊二十四、始レ自二十月一毎月二度、

東京圖書館

ガラス使用

（以一日十六日為式日）魚菜合十合、果十合、可献宇治及北政所之由、仰親隆朝臣、（一月荘四献之、一荘一年二箇度献之、）勵求美物、勿疎略、

〔同〕仁平三年九月十四日、去々年、厩舎人長勝近貞為使、下向奥州、先年可増奥州高鞍荘年貢之由、禅閤被仰基衡、（金五十両、布千段、馬三疋、）基衡不肯増之、久安四年禅閤以五箇荘譲余、同五年以雑色源國元為使、仰基衡曰、可高鞍金五十両、布千段、馬三疋、（本数金十両、布二百段、細布十段、馬二疋、）大曽祢布七百段、馬二疋、（本数布二百段、馬二疋、）本良金五十両、布二百段、馬四疋、（本数金十両、馬二疋、所分金五両、馬一疋、）預屋代布二百段、漆二斗、馬三疋、（本数布百段、漆一斗、馬二疋、）遊佐金十両、鷲羽十尻、馬二疋、（本数金五両、鷲羽三尻、馬一疋、）基衡不聴、國元其性弱不能責之、空以上洛、重遣延貞責之、去年基衡申曰、不得増所仰之数、可増進高鞍金十両、細布十段、布三百段、御馬三疋、大曽祢布二百段、水豹皮五枚、御馬二疋、遊佐金十両、鷲羽五尻、御馬一疋、屋代布百五十段、漆一斗五升、御馬三疋、本良金二十両、布五十段、御馬三疋者、仰曰、三箇所（本良遊佐屋代）所申非無其理、依請至于高鞍大曽祢両荘者、田多地廣、所増不幾、猶減本数、可進高鞍馬三疋、金廿五両、布五百段、大曽祢馬二疋、布三百段也、今日任此数、延貞持来三箇年年貢、（久安六仁平元同二）年来貢本数、然而返却不受、今年相合三箇年欲受之、増年貢事、成隆朝臣（高鞍預）俊通（本良預）所勧進也、故成佐諌曰、匈奴無道、不必受君命、是以禅閤時、度々雖有其議、不能果遂、昔孝文皇帝時南越尉他自立為帝、々名責他兄弟、以徳懐之、他遂称臣、與匈奴結和親、而背約入盗、令邊備守、不發兵深入、惡煩百姓、漢家日域匈奴唯以仁懐之、未得以威畏之、若欲果其事、基衡遂不聴之、君将失威於東土、遺嘲於後昆、願君熟察焉、成隆朝臣俊通諌曰、基衡以本数進年貢之時、君不受之、基衡必増之、縦不及定仰之数、何無所増、又基衡必阿媚奥竈運、不増之籌、願君勿和親矣、成佐曰、

東京圖書館

ガラス使用

古事類苑稿

少不增之二子求少利不顧君、若從其言、必有後悔焉、余從成隆俊通之諫、果如其言、成佐所言雖巧、慮不及二子、後日名延貞給細馬、依全使節也、

〔台記〕仁平三年九月十七日、自奥州莊々持来砂金一百六十五両、奉院、申可被充御惱御祈之由、

〔權記〕長保二年七月廿一日、左少辨元自内府（公季○藤原）名有即參、（被）命云、伊勢國鹿取莊代々相傳之處、公驗明白也、本作田非幾、而國司愁申於公家云、莊司等請作公田百六十町、不辨所當官物、仍雖遣國使、不能辨申、爲宗逌避、給撿非違使、令催辨件官物云云、仍明曉使官人等、蒙宣旨可罷下云云、若國司所申無止者、名上莊司於使廳、可被辨定理非之由、可奏者、仍即奏之、其勅命云、何不成朝臣參入之使、問案内、可被仰者、予答云、見御目録、欲頃之御前有名、即參候、勅問、申大臣令奏旨、仍先引勘御目録、去二月十三日宣旨下也、仰云、可令仰之旨如何、奏云、諸事糺決、使者向於事發所、若在地與在地官司若刀祢衆證者、相共可定也、況於件事、可尋作田町段事、在京不可知、若可尋領掌之理非、於使廳可定、然則至于田畠多少、使者向在地可定、抑先名代々公驗、辨知格之前後、若□格文、可遣撿使歟、即名藏人辨、被仰此旨、

〔源氏物語須磨〕さぶらふ人々よりはじめ、よろづのこと、にしのたいにきこえわたしたまふ、らうじ給ふみさう、みまきよりはじめて、さるべき所々の券など、みなたてまつりおき給ふ、それよりほかのみくらまち、をさめどのなどいふことまで、少納言をはか／＼しきものに見おきたまへれば、したしき家司どもぐして、しろしめすべきさまどものたまひあづく、

東京圖書館

ガラス使用

〈續世繼四小野ノ御幸〉大二條殿（○敎通）の三君（○歡子）ハ後冷泉院の女御にまゐりて、（○中略）後に皇太后にあがりて承保元年の秋御ぐしおろし給ひてき、猶さ法きの位ふかく、ひえの山のふもと小野といふ里にこもり居させ給ひて、（○中略）白河院いとおもしろき雪見と仰られてく、北山のかたさ侍りまうでけるを、すけまさが、その御随身ふと思ひよりまゐらく、そしものゝきさうなれ山をこしすふとへや、まゐらせ給もんもしんと思ひくかれまりまうでゝつかうまつるものみやハかりけん、みハかふしのひくいと雪まゝのけさ侍て、そふし法まにまゐらせ給、そしそのまゝまゐふとへや侍らんもゝんとつけさこえなまるハ、かの入道のこやかれ御よういありく法花堂に三昧僧鍾しりやのにまゐせさせすて、庭のうへいさうゝの人れあとふことゝもせもハうちいろ〳〵十具ハかり有けるが、ふのまへまゐりてそてせいこさんようい侍りけるを、おしいりて御らんずれバ、いと侍らん、いとえんなるしくやと、女房中けまどまうりていらしなるゝに、もてなりまゐらせけるくもしくしのまた、御車よするくさせのみて、かくとやハつりけん、法ゆうに侍りけるなとみかさうことてつるもうハ二人、ひとりハきさいの宮のてうしみこ尊いまゐるそてまいらむ、いま一人ハ、去ろうの孫のおほきみこの宮の法の師きもおそて、大かうし御出られまて、いろし給つるなまハ、法とその殿上人どうりくまいりくいとめ法らしき法ようりいまハ、つりかりかくるをみその時かしこくうちを御らんせらるゝかくしせかぬふとこうち中けれバ、雪みんみまうりのそてりう給人やハあるとゝのりまもせなる月と雪とをまことゝえハつるゝ、法て院より御法のひあ

古事類苑稿

ほそいところくるしく、あはひやうたてまいるまじうちいさくおとこそよういして、有さまくそしうたせまうけられとて、其のつくふとうや、此荘の券してまつらをなくせければ、まいりつゝうけつるたとこをんなこれうまのそこなれと、いとゆきこつけきこえさせたまふ程に、なつけしまひけるとそよう侍しかば、とみの名は、此ぬはゞことうや、殿上人など、ふかくのしの辨とうや、たてしうたまふとよう侍さうらき、そのをゝてらふと八講のこゝろにて三昧をこなふ僧をまいらせらみふつるなり、

百練抄（五 堀川）寛治五年六月十二日、給宣旨於五畿七道、停止前陸奥守義家隨兵入京、并諸國百姓以田畠公驗、好寄義家朝臣事、件由緒藤原實清與清原則清相論河内國領所之間、義家朝臣與舍弟義綱互擁兩方爭威之間、欲企攻伐、天下之騷動莫

東京圖書館

大於此、

朝野群載（七 公卿家）民部卿（○藤原 宗通）家政所下　阿輪田莊

可早任廳宣打定四至牓示莊領事、

使太政官史生紀為忠、

右件四至廣博、為國衙有訴、又為莊家動牢籠出來、仍任國司廳宣、在廳人相共行向東西南北阡陌、且任本四至、且縮廣博之地、莊家并國衙等、共無後日之訴、定四至、打牓示、永注向後之牢籠、可為領之狀、所仰如件、敢不可違失、故下、

永久五年十月十三日、

案主民部史生藤井、

知家事主殿屬藤井、

主税屬藤井、

令主計少允中原、

別當前阿波守藤原朝臣、

内匠兼左大史辨筭博士越後介小槻宿禰（在判）、

太政官史生記文章博士兼大内記越中介藤原朝臣（在判）、

古事類苑稿

東京圖書館

ガラス使用

散位藤原朝臣（在判）、

散位藤原朝臣、

散位藤原朝臣（在判）、

〔節用集〕之庄主（シヤウシユ）、

〔同〕之庄司（シヤウジ）、

〔朝野群載七攝録家〕補御荘司、

右大臣家符尾張國冨田荘、

大膳少進平季政、

右人補任下司職、可令執行荘務之狀、所仰如件、宜承知、依件行之、故符、

令、

従主計允播磨、

別當某、

知家事大膳屬、

某

某

康和五年二月十日

〔中右記〕承徳元年八月廿五日、叅一條殿南北、次叅大殿、（京極殿南）付前中務少輔廣綱、令申事、前日以為房朝臣所下給之恪勤侍信高申文、内藏寮蟹谷荘司所望、相尋子細之處、至信高者父男年来為彼荘司、仍信高尋父職、可被補之由所申請也、至為章者補荘司廿餘年、于今無過怠、兩人所申共非無其理、只可隨仰者、仰云、本司為章無過怠者不可改、若有其怠時可補信高者、但又此旨一日以為房仰下了、未下知歟、暫祇候、後歸家之後、以件為章補彼荘司了、

〔同〕永久二年五月三日、有貞来云、為源大納言使、荘司男被殺事、是大藏卿荘司所為者、先可問大藏卿之由、仰了、

〔顯廣王記〕安元三年二月廿二日、令成伊豫荘下司下文、獻三位

中将平、是依被吹擧也、

〔十訓抄十二〕小一條左大将濟時の六代にあたりて、宗綱の子宮内卿師綱といふ人ありけり、白川院に仕へたるが、さかしき才幹はなかりけれども、ひとへに奉公を至して、私をかへりみぬ、忠貞なるによりて、近く召使はれたり、その志ありしにや陸奥守になされたれば、彼国にくだりて検注行ひけるに、信夫の郡司にて、大庄司季春といふ者、これをさへて、まうけたり、国司宣旨を帯して、なをさへつてとらんとするほどに、季春ふせぎとゞめんがために、試り兵むかふ数間合戦に及びて、国司方に人あまた打たれにけり、国司大にいかりて、事の由を在国司基衡にふれたり、此事おどろきに出来せさせをかりけれ、国司のこれなどきけくゝゑてかひなくべしとまで思はざりければ、基衡さいひて季春をよびていふぞあるべきさといひ合けるなり、主命によりて宣旨帯したるうへには、一矢は射ていぬ、この上はいかにも違勅のがれべきにあらず、季春が頸を切て早く国司の心はしづまり給はんすれば、我はしらざるにて、季春が一向とがになして切て身をやすくしてあるべしといひたれば、実に此外は平らぐべき力なく覚えて、数なから国司の返ずに申けるは、例なき検注を行ふ身にて、季春おとなのやうを申のぶる斗こそ候ひつれ、かくなどの狼藉出来事申しそあやまり候はずにおもれおもひ給へとも、基衡法師に知及侍りては、早検見を給りて季春が頸を切てまゐるべき旨申たるかくは、聞えつはりくて是非なるり、季春代々伝はる後見なる上、乳子なり主人の命によて志いそぐる事なく、忽り命を失ふ事せちにいて母

ガラス使用

しく覚けるが、とかく案じめぐらして我妻女ども出
あはせて紀馬などを先として、おほくの金銀その外、
絹布やうの物どもとらせて我は志らぬ由にて季春が
命をたすけんがために、国司のもとへやる、妻女目代
をかたらひて、季春がなりがたく不便なるやうを詞を
つくしていひて、彼が命をこひうけければ、目代執申に、国
司大に腹立て、季春国民身にて、かくおほけなき僻事をし
出したる、公家に背き宰吏あなづりて其科までに縁及
にまかる状をきけば、とてふかくめぐるまじ、君の聞えん、
其名も多し、人の識又いつくむくぞ、此事更に申べからずと
ぞいはれける、〇中略それのち検非違使所書生并案主検使に
指遣はしけりければ、甚衛力及ばれなくて、季春并子息
舎弟等五人が頸を切てげり、其後こそ国司志づまりにけ
れ、国司の者どもそのいひなしは、季春が命ばかりはたすけてんとあ
り、国司に贈所の物一萬両の金をささげとして、おほく
の物也、殆当国の一任の土貢にもまさりければ、悦をなして
なりぞ、女にはかしこくはかりてつかふべきめしをたすける、
国司の憲法あまりつよしとぞおかめのしをけるかく
てあれば、国俗なびきしたがひて、思はぬ所行ひろまりしを、
務威をなす前々の国司よりもこよなうまさりたり、後に
君聞えていみじく御感有けるとぞ、

〔朝野群載七（公卿家）〕依荘園訴、送国衙牒、
大皇太后宮大夫家牒　播磨国衙、
欲被如舊立券所領字有年荘、兼勞免司寄人等臨時雜役、
狀、副田地坪付、并司寄人實名、
牒件荘代々相傳之處也、而本公驗等去四月十三日、左衛門督

三條家焼亡之次、紛失已了、仍如舊被立券、兼勞免司寄人等臨時雜役者、牒送如件、乞也、衙察、状欲立券、故牒、

長和四年十月十五日、　知家事忌部、

令、　書史官少屬秦、

前安藝守藤原朝臣、　知家事大和掾粟田、

散位　橘朝臣、　式部史生安倍、

宮權大進橘朝臣、　左衛門府生河内、

散位藤原朝臣、　左兵衛府生文、

前石見守清科朝臣、　宮權少進在原朝臣、

左大史　粟、　大學允三善、

同（二十二諸國雜事）國符　赤穂郡司、

應免除太皇大后宮大夫家御領有年莊司寄人等臨時雜役事、

司捌人、

捴撿挍掾播磨傳野、撿挍内舍人播磨音名、別當播磨興富、

預三人、（孫主良光、同春遠、同貞春、）

專當安曇安信、

寄人肆拾壹人、

秦得吉、　同安成、　同用成、　同用則、　苅田忠正、

佐伯直則、　秦時正、　山邊重則、　孫主利種、　小邊市正、

秦本弘、　同吉連、　春日直安、　同弘安、　同成時、

山邊重正、　安曇貞信、　同豊信、　佐伯守忠、　紀行成、

秦清本、　同種正、　安曇貞道、　佐伯有安、　秦元時、

百濟述离、　安曇述友、　同述平、　同久頼、　刑部堺成、

刑部利成、　孫主依経、　同有任、　佐伯安遠、　同貞遠、

秦豊近、　春日得成、　若湯祐継、　同貞光、　秦種諫、

早部宮正、
右彼家去十月十五日牒、今月十三日到来偁、件荘代々相傳之處也、而本公驗等、去四月十三日左衛門督三條家焼亡之次、紛失已了、仍如本立券、免除司寄人等臨時雜役者、所仰如件、郡宜承知依件免除、不可違失、符到奉行、

大介藤原朝臣説孝、　権大掾大味宿祢、
大掾播磨宿祢、
佐伯朝臣、
権大掾播磨、
大目刑部、
小目刑部、

長和四年十一月十六日、

〔正木文書　二〕左衛門督（○藤原忠雅）政所、下上野國新田御荘官等、

補任下司職、
源義重、（○新田義重、）
右人依為地主補任下司職如件、御荘官等宜承知依件用之、敢不可違失、故下、
保元二年三月八日、　案主官内録菅野、
令前中務録山
別當散位三善朝臣
散位紀朝臣
散位中原朝臣、
大監物藤原朝臣
散位藤原朝臣
明法博士中原朝臣、

〔同　二〕こあまゝ、あれとらいわうごぜ（○来王御前）のりゝのす

をもへハ、にた、ねみしやう（○新田御荘）ハゆづりしかあり、かのるすらいわうごせんをとろかまあるへからす、これにとりても、きかん（○高）とてハらいわうこせんか、くにそれゆへるあり、がさめにおろかにあるへからす、ふかんのうぞ、をんなつか（○女塚）えだ（○江田）かみしも（○上下）たなか（○田中）をゝだち（○大館）かすかハ（○粕川）こすみ（○小角）をしきり（○押切）いでのつか（○井出塚）せらた（○世良田）みつき（○三木）かみいまい（○上今井）しもいまい（○下今井）かみひらつか（○上平塚）しもひらつか（○下平塚）きさき（○木崎）丁ふくし（○長福寺）たこう（○多古宇）やきぬま（○八木沼）こらのがうくしさいにゆづりわたすそ、たのさまたげあるへからす、あなかしこ〳〵、

仁安三年六月、　義重　判

〔殿暦〕嘉承二年五月二日、依次宜攝津國垂氷莊右大辨時範朝臣預之、和泉國信達莊預兵部大輔師俊奉、

〔東寺百合古文書〕三　中原親貞解　申請領家政所裁事、

請被殊蒙鴻恩鹿子木御莊預所職次第相傳文書等為盜人依被引失為備向後證據成下御判子細狀、

右謹撿案內、件預所職相傳由來者、根本領主沙彌壽妙也、彼壽妙讓嫡男重方、次重方讓嫡男高方、次高方讓養子重俊、次重俊讓賀行親、次行親讓嫡男親真、次第相傳如此、而高方之時、為被停止國衙之非法、去應德三年冬比、相具調度文書、奉寄進大貳殿、實政御領畢、仍於地頭預所職者、以本領主高方之子々孫々、永可為重代傳領之職之由、賜彼家下文、代々所相傳來也、然間親貞為御使、下向彼御莊之剋、相傳所帶之文書等、雖可置私宿所、成盜人之恐、納置殿御倉、罷下之間、去十一月廿二日夜、數多群盜乱入、打開御倉、不殘一物掠取畢、其內私文書等少々、皮古同

ガラス使用

古事類苑稿

東京圖書館

被取失畢、若雖末代帯件文書有致濫訴之輩者、處彼盗犯伴類、可被行罪科也、但如此引失田薗文書之時□紛失狀取國司判行者承前之例也、而今於親貞文書者、年来知食子細之上、於御倉失畢、何及他人判行哉、只恐申下領家御判、欲備後代之證文、望請鴻恩、垂御賢察、早被成御判者、將仰正理之貴矣、仍勒子細、以解、

長寛二年十二月廿七日　中原親貞上

莊官

〔運歩色葉集〕莊官、

莊園総官下司

〔節用集〕庄官（シヤウグワン）、

〔玉海〕養和元年二月八日、又被下宣旨、注進持參也、其狀如此、

治承五年二月七日　宣下、

以前越中守平朝臣盛俊、宜為丹波國諸莊園総官下司、件宣旨上卿時忠卿、職事行隆云云、余密々問之、以宣

宣旨被補莊園下司、有例哉如何、答云、未曾聞云云、

莊長

〔類聚三代格 十五〕太政官符、

應禁親王及王臣家莊長私佃事、

右被大納言從三位神王宣偁、奉勅、諸家莊長多營私佃、假威乘勢、蠹民良深、姧猾之源、不可不絶、宜加禁制、不得更然、

延暦十六年八月三日、

〔同 八〕太政官符、

應徵寄住親王及王臣莊浪人調庸事、

右浮宕之徒、集於諸莊、假勢其主、全免調庸、郡國寛縱、曾無催徵、黎元積習、常有規避、宜令國宰郡司勘計見口、每年附浮浪帳、全徵調庸、其莊長等聽国撿挍、若有莊長拒捍及脱漏一口者、禁身言上、科違勅罪、國郡阿容、亦與同罪者、以前被大納言從三位神王宣偁、奉勅、如件、宜早下知、

ガラス使用

延暦十六年八月三日、

按スルニ、浮宕之徒集於諸莊トハ、即チ寄人ヲ云ヘルニテ、莊長ハ莊司ヲ云フナリ、

莊園補地頭

〔神皇正統記（後鳥羽）〕平氏滅亡してしかハ天下本のごとく、君の御まゝなるへきかと覺えしに、頼朝勲功まことにためしなかりけれハ、權をわかちしまゝなりき、〇中略あらゆる莊園郷保に地頭を補せしかハ、本所もなきかことくになれりき、

處田莊

〔日本紀（二十五 孝徳）〕大化二年春正月甲子朔、賀正禮畢、即宣改新之詔曰、其一曰、罷昔在天皇等所立子代之民、處々屯倉（ミヤケ）、及別臣連伴造國造村首所有部曲之民、處處田莊（タトコロ）、仍賜食封大夫以上、各有差、降

〔日本紀略（八 花山）〕永觀二年十一月廿八日、被定嫌破錢并停止格

後莊園、

〔權記〕長保二年八月四日、請左府次、申志摩守善道稱、有除供御所以外可禁止院宮家莊園之旨、凌責勸學莊、件莊依爲格前之處、代々無如此之責、加以於此院事、縱雖非理、猶可廻權議、況格前院領何有禁止乎、仰云、國司所爲不當、早可進免判、即仰別當行忠、

〔春記〕長久元年五月二日、有召參内、即參御前、仰云、〇中略莊園事、申可停止由、愷可停止之事如何、〇中略予先持參関白殿、々々下相遇給御覽了、〇中略予此次傳申仰旨、命云、諸國莊園事、可停止事、先日内々奏聞了、只被定仰之日、諸卿相定奏歟、其次愷可被仰下者也、

〔同〕長久元年六月三日、諸國莊園事、子細先日奏達了、當任以往一兩代以來、新立莊園等、長可隨停廢、若有阿容之心者、課以違

東京圖書館

ガラス使用

勅之罪トヤ、可被仰哉、格後莊園可停止之由、度々有官符宣旨、然而一切無停止、高家權門責陵國司、或又公文勘了之外欲、太非常也、只一兩代以後莊園誠全可禁止之由、被仰了、○（中畧）莊園事、指一兩代為後代可在其難、只近代以来莊園長可停止、若有容隱者、可解却見任、又百姓之中有募立之輩、國司慥可召進其身之由、可宣下歟、

〔同〕長久元年六月八日、莊園事、國司所申請、其任以後莊園可停止之由所申也、依請可停止、但國司猶有阿容不申事由并不加制止之輩、可解却見任、又百姓等中有募立之輩、國司慥長可追却其國境之由等、同可仰下也、

〔扶桑略記〕（二十九後三條）延久五年二月廿三日、勅、止寛德二年以後新立莊園、縱雖彼年以往、若券契不分明、於國務有妨者、同停止之、

〔愚管抄〕（四）延久の記錄所とて、はじめておかれたりけるは、諸國七道の所領の宣旨官符もなくて、公田をかすむる事、一天四海の巨害なりときこしめしつめてありけるは、すなはち宇治殿（藤原頼通）の時、一の所の御領〱とのみ云て、莊園諸國にみちて受領のつとめたへがたしなどいふをきこしめしもちたりけるにこそ、宣旨を下されて、諸人領知の莊園の、文書をめされけるに、宇治殿へ仰られたりける、御返事に、皆さ心得られたりけるにや、五十余年君の御後見を、つかうまつりて候し間、所領もちて候ものゝ強縁にせんなどおもひてよせたび候ひしかば、さにこそなんど申ける計にて、まかり過候き、なんでう文書かは候べき、たゞそれがしが領と申候はん所の、しからぬ、しかならぬ、きこしめされんをば、いさゝかはゞかりはなく、めさるべき事なれば、かやうのことこそ申

沙汰あるべき身までは、かく我法くして申されければ、つき也、とさはやかに申されたりけれど、あだに御支度のさうゐのことにて、むこに御案ありて、別に宣旨をくだされて、この記録所へ文書どもめすには、前大相国の領を除くといふ宣旨下りて、中々つやつやと御沙汰もなかりけり、この御沙汰をばいみじきことと世中に申ける、

〈神皇正統記後醍醐〉中古となりて、荘園おほく立られ、不輸のところいできしより、乱国となれり、上古にも、此法はさだめられけるにや、推古天皇の御時、蘇我の大臣馬子封戸をまけて寺によせんと奏せしを、終にゆるされず、光仁天皇は、永く神社佛寺によせらるゝ地をも、永の字は一代にかぎるべしとなり、後三條院の御世こそ此法をおこされて、記録所おかれて、國々の荘公の文書をめして、おほく停廢せられしかど、白河鳥羽の御時より、新立の地いよいよおほくなりて、國司のしる所百分が一になりぬ、

〈東大寺小櫃文書〉

廳宣　東大寺玉瀧御杣司

可早進上御杣本公驗事、

右去治暦五年三月廿三日、下五畿内七道諸國官符偁、寛德二年以後、新立莊園、永可停止者、加以雖往古莊園、券契不明、有妨國務者、嚴加禁制、同以停止者、官符到來之日、早可進本公驗之由、先日雖加催、于今不進上者、重所仰如件、嚴制重疊、不可延怠、故宣、

延久元年閏十月十一日、

ガラス使用

大介藤原朝臣

按スルニ、瀧杣ハ伊賀ニ在リ、

後二條關白記寛治七年三月三日、頭辨来云、院宣曰、諸國莊薗濫溢、欲制止、思食如何、又延久應德寛治元年等、可被停止歟、内々所被尋仰也、余申云、尤可候之事也、於仗儀可被定申歟、以此旨令奏之、頭辨云、更不可相叶云々、余云、其事如何、國司密々皆實所被立也、嘲弄無極、受領八年任巡不被留云々、藏人来云、假立馬呂云々承了、

中右記嘉保元年四月廿五日、美作國申請（守基隆）雜事二箇條、（一條請被制止新立莊園等事、一條泰期以前調庸物等事云々、）

後二條關白記承德三年五月十二日、新立莊園停止宣旨被下、

裏書六月十二日、左少辨時範申云、（○中畧）莊薗文書、後三條御時（延久之項、）依召所進也、望其時不進上之條、有相違者、披見可然之文書、可令奏者也、

長秋記天承元年八月十九日、中宮大夫（○藤原宗忠）云、以宗忠之位田、稱新立莊、申停廢事頗以訟也、然而被随停止時、副進民部省欲訟申、仍於定任續文、可被裁許之由、所令申也者、民部卿（○藤原忠教）云、於新立莊事、可随勅定之由、所令申也、故何者、雖起請以前莊、無會釋時、從停止、雖已後莊、非強浮次、令停廢、仍所令申也者、

雲州消息下近江莊事、右件莊、格前所立也、山野四至田疇坪付已載官省府、而當宰吏輙以收公、雖端丁寧之詞、已無子細之答、撿田收納之時、多以致其煩、郡司里長雖知先例、依無免判、或切宛重色、或課臨時雜役、莊司申文進覽、早可賜國判者也、廳宣留守所下文何事有哉、

古事類苑稿 東京圖書館

ガラス使用

諸事追啓、某謹言、

〔勘仲記〕弘安十年七月十三日、内大臣殿令著陣給奧、其後人々著陣抑條事定事、近年不被行之上、卿被仰職事、々々仰官、々々召國解吉例國申合本所被定下之國解至来之後、内覧奏聞可勘例之由、宣下大臣、々々以辨被下知官、々加續文返上、大臣被下職事、々々令諸卿可定申之由宣下也、為令知子孫委記之、

定文

官勘申越中國司申請三箇條雜事、

一請任度々官符被停止新立莊園加納餘田等事、

淡路國司申請三箇條雜事、

一請賜官使被停止寛德以後新立莊園幷本免外加納田畠等事、

官續文、

太政官符越中國司

雜事貳箇條、

一應任先符旨停止所々莊園、兼注進其年紀及召進好立輩事、

右得彼國今七月廿四日解状偁、案去寛德二年下五畿七道諸國官符偁、内大臣宣、奉勅、停止前司任中以後新立莊園、若不遵符有違犯輩、國司解却見任、永不叙用、百姓将處重科、敢不寛宥者、又天喜三年三月十三日、同賜五畿七道官符偁、右大臣宣、奉勅、宜仰諸國、寛德二年以後、莊園且加禁遏、永令停止、且所好立之輩、勘録子細、召進其身、若致對捍、早不叅上、慥注姓名、須注言上國司且忘符旨、無心勤行、解却見任、永不叙用者、件莊園等、不唯成土民拒捍之煩、兼又有國司解任之文、縱募權勢、何不言上乎、當國往古無有莊園、而近代之間、所部百姓為遁公役、属權門

ガラス使用

而立莊園、語宰吏而領田地、不辨調庸、不勤課役、拒捍國務、侮慢朝章、爰寛德二年以後莊園前司任中依符旨悉所停止也、而及得替朞更以興立、又臨任終年新又加立、囙之公役之民、不幾應輸之由甚少、恒例乃貢殆難進濟、而拒捍之民空忘綸旨、無辨租調、權勢之家不用制符、好立莊牧、雖施治略、其可得乎、重不賜官符、何以行吏務、望請官裁、任格條幷度々官符旨、被停止件莊園、若猶不隨制旨者、國司名進莊牧司、若致對捍不能名進、注名言上、比挍公驗、新制以後所立莊園、早以停止、若不出公驗、又從停止者、右大臣宣、奉勅依請者、以前條事如件、國宜承知依宣行之、符到奉行、

權左中辨源朝臣、　　左大史小槻宿祢、

治暦元年九月一日、

太政官符淡路國司、

雜事伍箇條、

一應遣官使停止寛德以後新立莊園幷本免外加納田畠等事、

右得彼國守左少辨正五位下平朝臣實親去三月十日奏狀偁、謹撿案內、寛德二年以後新立莊園可停止之狀、前格後符嚴制連綿、何況致起請、已前莊於本免外者可停廢之由、同所被裁下也、當國者狹少第一之地、凋弊無雙之境也、其中新立莊園充滿、應輸租田不幾、式數濟物爭可辨慎乎、代々之吏申下宣旨、雖令停廢、或任終之比、如元免除、或得替之剋、偷以與判、國之亡弊職而斯由也、然則新被下綸旨、欲令禁遏、請天恩、因准先例、給官使、被停止件新立莊園幷加納田畠料、將廻興復之計者、右大臣宣、奉勅依請者、

一應停止國內公民入籠莊園或祢神人或号莊民對捍國務事、

ガラス使用

右得同前奏狀偁、謹撿案內、神社佛寺權門勢家莊園、占膏腴地、不勤國役、然間在々調丁好入莊內、鄕鄕民烟逐日減少、何況宰吏得替之尅、莊司招取公民、或募權勢、或假神威、敢不還住、皆為莊民、因玆莊家者連甍比棟、郡鄕者有地無人、望請天恩被停止莊園左道者、召返公民、令致調庸之勤者、同宣、奉勅依請者、以前條事如件、國宜承知依宣行之、符到奉行、

右中辨源朝臣、　左大史小槻宿祢、

大治二年五月十九日、

廢攝津國莊園

玉海壽永元年七月廿四日、傳聞攝津國為法皇○（後白河）之御沙汰、國內之莊園併停廢、其所出可及六万餘石一所家領、多在其中云々、

廢寺莊園

同承安三年十一月十二日、參御所、先是關白○（藤原基房）被候、言談之次、被語云、今夜被下宣旨云、十五大寺領、諸國末寺莊園、併以沒官、於其寺用者可付國司云云、未曾有事也、凡近代南北衆徒恣推朝務、如無皇憲、被誡之條其理可然、但此條可被懲盡僧徒也、專非佛之過怠、聖武天皇之東大寺已下、代々聖主之御願、淡海公之興福寺已下、世々賢佐之建立、悉以停廢、誠非直之事也、縱雖無始終之沙汰、一旦被載宣旨之趣、後代有恥、哀哉云々、此條一切不被仰合人云々、抑我朝者、偏依莊園滅亡者也、然者神社佛寺權門勢家之領、併被停廢、且遂延久之先符、且及延喜之古風者、非此限、其條又不可限南都之諸事也、努々

同治承元年五月廿九日、台嶽末莊園仰諸國、示被注進之、是為停廢歟、

同壽永二年十月七日、冣勝金剛院領、伊賀國四箇莊皆悉停廢、國司已下兵衞尉義經、歷院奏所停廢云々、仍付泰經卿經院奏、今日以兼親所示送也、如返事者、大畧勿論事歟、

所廢莊園仍舊領之

禁微糧莊園

〔百練抄 （九安德）〕壽永二年十月、東海東山諸國年貢神社佛寺幷王臣家領莊園如元可隨領家之由、被下宣旨、依賴朝申行也、

〔玉海〕左辨官下（五畿内諸国七道諸国）同之、

應早仰國司停止被催公田莊園兵粮米事、

右治承以降、平氏黨類暗稱兵粮、掠戚院宮、恣宛五畿七道之莊公、已忘敬神尊佛之供、範世之衰微、民之凋弊、職而由斯、況源義仲、不改其蹤、益行此惡、曾失朝威、共背幽冥、爰散位源朝臣賴朝不廻幾日、討滅西賊、然則干戈永戢、宇宙静謐、權大納言藤原朝臣出親宣奉勅、早仰諸國司、宜停止件催者、諸國承知、依宣行之、

壽永三年二月廿二日　大史小槻宿祢

按スルニ、莊公ハ、公田ト莊園トヲ云ヘリ、而シテ公田トハ、總テ國司ニ屬セル者ヲ云ヒテ、古ノ公田トハ異ナリ、

莊園置地頭

〔吾妻鏡 四〕文治元年十一月十二日、因播前司廣元申云、世已澆季、梟惡者尤得秋也、天下有反逆輩之條、更不可斷絕、而於東海道之内者、依為御居所、雖令靜謐、姧濫定起於他方歟、為相鎮之、每度被發遣東士者、人々煩也、國費也、以此次、諸國交御沙汰、每國衙莊園、被補守護地頭者、強不可有所怖、早可令申請給云々、二品殊甘心、以此儀治定、本末相應、忠言之所令然也、

〔同 五〕文治元年十二月六日、被獻右府（兼実）〇藤原御書曰、言上事由、

右言上日来之次第候者、定子細事長候歟、但平家奉背君、傍奉結遺恨、偏企濫吹候、世以無隠候、今始不能言上候、而賴朝為伊豆國流人、雖不蒙指御定、忽廻籌策、可追討御敵之由、令結搆候之間、御運令然之上、勳功不空、始終已討平伏敵於誅、奉世於君、日来之本意相叶、公私依悦思給候、先不待平家追討之左右、為停近國十一箇國武士之狼藉、差上二人使（久経、國平）猶私下知依有

ガラス使用

恐、一々賜院宣、可成敗之由、仰含候畢、仍彼國狼藉、大略令沙汰鎮候之後、依別仰重又件使者男被下遣鎮西四國候、已賜院宣、令進發候畢、如此之間、種直隆直種遠秀遠之所領者、依為没官之所、任先例可置沙汰人職之由、雖令存候、且先乍申事之由尚輙于今不成敗候、何況自餘之所、不及成敗候、如近國沙汰、任院宣、可鎮旁狼藉之由、兼令存知候之處、不審次苐出来候、以義経補九國地頭、以行家被補四國地頭候之條、前後之間、事與意相違、彼輩各相憑其柄、巧非分之謀、令下向候之刻、雖無指寄攻之敵、天譴難遁、乗船解纜之時、入海浮浪、郎従眷属即令滅亡之條、誠非人力之所及、已是神明御計也、而彼兩人其身未出来、暗跡逐電、旁分手令尋求候之間、國々莊々門々戸々山々寺々定狼藉事等候歟、召取候之處、何不相鎮候哉、但於今者、諸國莊園平均可尋沙汰地頭職候也、其故者是全非思身之利潤候、土民或令梟悪之意値遇謀叛之輩候、或就脇々之武士寄事於左右、動現奇怪候、不致其用意候者、向後無四度計候歟、然者雖伊豫國候、不論莊公可成敗地頭之輩候也、但其後先例有限、正税已下、國役本家雜事、若致對捍、若致懈怠候者、殊加誡無其妨、任法可致沙汰候也、兼可令御心得此旨給候、兼又當時可被仰下候事、愚意之所及、乍恐注折紙、謹以進上之、一通院奏折紙、令付師中納言御候、今度天下草創也、尤被究行淵源候、殊可令申沙汰給也、天之所令奉與也、全不可及御案候、以此旨可令洩申右大臣殿給之狀、謹言上如件、

十二月六日　　頼朝（在判）

謹上　右中辨殿（○又見玉海）

〔同　四〕文治元年十二月廿一日、於諸國莊園下地者、関東一向可令領掌給云云、前々稱地頭者、多分平家々人也、是非朝恩、或平

ガラス使用

古事類稿

家々人也、是非朝恩、或平家領内、其號補置之、或國司領家、為私芳志、定補于其莊園、又令違背本主命之時者、改替之、而平家零落之刻、依為彼家人、知行之跡、被入沒官畢、仍施芳恩、本領主空手後悔之處、今度諸國平均之間、還斷其思云云、

保暦間記文治元年十月、賴朝勝長壽院ヲ造テ供養ヲ遂シ、導師ハ高頭僧正也、其後北條四郎時政源二位ノ使トシテ上洛メ、日本國ノ國々ニ守護ヲ置キ、郡莊ニ地頭ヲ居テ、總地頭職ヲ給ハラント申、法皇未タ日本國ニ無例事ナレハ、思食シ煩ケレ𪜈、源二位申所難闕トテ被免ケリ、平家天下ヲ行レシヨリ、尚武家ノ權威ハ倍リケリ、

吾妻鏡四文治元年十一月廿八日、補任諸國平均守護地頭、不論權門勢家莊公、可充課兵粮米（段別五升）之由、今夜北條殿謁申藤經房卿中納言云云、廿九日、北條殿所被申之諸國守護地頭、

東京圖書館

兵粮米事、早任申請、可有御沙汰之由、被仰下之間、帥中納言被傳勅於北條殿云云、

按スルニ、田土一段ゴトニ、五升ノ兵糧ヲ課スルヲ以テ、是ヨリ後ニ直ニ段別ト稱セリ、

殿暦天永元年三月廿七日、出羽守光國予莊寒河江莊ヲ乱入、仍可遣家使之由、有院御氣色、

中右記永久二年十一月朔日、晩頭參院御物忌也、源永事付左衞門佐令申、仰云不可、居住太政大臣（忠實）○藤原莊之由仰下、早可追放、從類交名奏聞、留御所、　十六日、以宗實奏事、行重下部、後遣下野國太政大臣莊、今日到來、莊内下人皆前使追却了、但莊下司棟佐子息在莊外、然而廳使觸示之後、其後被燒宿所了、雖無隆計也、棟佐子男所為欤者、仰云、棟佐在京、早可召進之由、可責棟佐者、則下知行重了、

〔今昔物語集二十八〕大藏大夫藤原清廉怖猫語第卅一

今昔大藏ノ丞ヨリ冠リ給ハリテ藤原ノ清廉ト云フ者有キ、大藏ノ大夫トナム云ヒシ、其レカ前世ニ鼠ニテヤ有ケム、極ク猫ナム恐ケル、然レハ此ノ清廉カ行キ至ル所々ニハ、若男共ノ勇タル清廉ヲ見付ツレハ猫ヲ取出テ見スレハ清廉猫ヲタニ見ツレハ極キ大切ノ要事ニテ行タル所ナレトモ、顔ヲ塞テ迯テ去ヌ、然レハ世ノ人此ノ清廉ヲハ猫恐ノ大夫トソ付タル、然テ此ノ清廉山城大和伊賀三箇國ニ田ヲ多ク作テ、器量ノ徳人ニテ有ルニ、藤原ノ輔公ノ朝臣大和ノ守ニテ有ル時ニ、其ノ國ノ官物ヲ清廉露不成サリケレハ、守何シテ此レヲ責取ラムト思フニ、无下ノ田舎人ナトニモ非ス、諸司労ノ五位ニテ京ニ為行ク者ナレハ、廳ナトニモ可下キニモ非ス、然トモ緩ヘテ有レハ、盗人ノ心有奴ニテ此彼云テ出シモ不遣ス、何カセマシト思ヒ廻シテ思ヒ得テ居タル程ニ清廉守ノ許ニ来ヌ、守可謀様ヲ案シテ侍ノ宿直壺屋ノ極ク全クテ二間許有ル所ニ、守一人入テ居ヌ、然テ彼ノ大藏ノ大夫此ニ坐セ、忍テ聞キヌヘキ事有ト云ハセタレ、清廉例ハ氣色惡氣ニ坐スル守ノ此ク疎ヤカニ宿直壺屋ニ呼ヒ給ヘハ、喜ヲ成シテ垂布ヲ引キ開テユクリモ无ク這入ヌレハ、後ヨリ侍出来テ其ノ入ツル遣戸ヲハ引立テツ、守ハ奥ノ方ニ居テ此ニト招ケハ、清廉畏マリツツ居サリ寄ルニ、守ノ云ク大和ノ任ハ漸ク畢ヌ、只今年許也、其レニ何ニ官物ノ沙汰ヲハ今マテ沙汰シ不遣ヌソト何ニ思フ事ソト、清廉其ノ事ニ候フ、此ノ國一ツノ事ニモ不候ス、山城伊賀ノ事ヲ沙汰仕リ候フ間ニ、何方モ沙汰仕リ不遣スシテ、事多ク罷成ニタレハ否仕リ不遣ヌヲ、今年ノ秋皆成シ畢候ヒナムトス、異折ニコソ此モ彼モ候ハメ、殿ノ御任ニハ何カテカ愚ニハ候ハム、此マテ下申テ候ユ

東京圖書館

ソ心ノ内ニハ奇異ク思給ヘ候ヘハ、今ハ何ニテモ仰セニ随テ
負ノマヽニ辨ヘ申テムト為ル物ヲハ穴糸惜シ千万石也ト云フト
モ未進ハ罷リ負ヤナム、年来随分ノ貯ヘ仕タレハ此マテ疑ヒ思
食シテ仰セ給フコソ口惜ク候ヘト云テ、心ノ内ニハ此ハ何事
云フ貧窮ニカ有ラム屁ヲヤヒリハ不懸ヌ返ラムマニ伊賀ノ國
ノ東大寺ノ荘ノ内ニ入居ハナムニ極ムカラ守ノ主也トモ否ヤ
責メ不給ムサラ、何ナル狛ノ者ノ大和ノ國ノ官物ヲハ辨ヘケル
ソ前ニモ天ノ分地ノ分ニ云成シテ止ヌル物ソ、此ノ主ノシ
タリ顔ニ咲ク慄ニ取トラム宣フ嗚呼ノ事也カシ大和ノ守ニ
成給フテニ思ユノ程ハ見エヌ可咲キ事也トカシ思ヘトモ、現ニハ
極ク畏マテリ手ヲ摺ツヽ云居ヲタル守盗人ナル心ニテ否主此
ノ口浄クナ不云ソ、然リトモ返ナハ使ニモ不會スシテ其ノ沙汰
ヨモ不為シ、然レハ今日其ノ沙汰切トテム思フ也、主物不成シス

東京圖書館

テ否不返ラシト云ヘハ、清廉我カ君罷返テ月ノ内ニ辨ヘ切候
ヒナムト云フヲ守更ニ不信スシテ云ク、主ヲ見進テ既ニ年来ニ
成ヌ、主モ亦輔公ヲ見テ久ク成ヌラム然レハ互ニ情无キ事ヲ
ハ否不翔ヌ也、然レトモ只今有心ニテ此ノ辨ヘ畢テヨ清廉何
テカ此テハ辨ヘ申シ候ハム罷返テ文書ニ付テコソ沙汰シ
申シ候ハメト云フ、其時ニ守音糸高ク成テ居上テ左右ノ腰ヲ
ユスリ上テ氣色糸悪ク成テ主然ハ今日不辨シヤト今日輔公
主ニ會テ只死ナムト思フ也、更ニ命不惜ラスト云テ男共ヤ有ル
ト聲高ニヤカ呼フニ二音許ニ呼ヘトモ清廉聊カ動モ不為スシテ、
類咲テ只守ノ顔ヲ護テ居タリ、而ル間侍答ヘテ出来タレハ守
其ノ儲タリツル物共取テ諸来ト云ヘハ、清廉此レヲ聞テ我ニ
ハ否恥ハ不見セシ物ヲ何事ヲ何ニセムトテ此ハ云フニカ有ラムト
思ヒ居タル程ニ、侍共五六人許カ足音シテ来テ遣戸外ニテ

東京圖書館

ガラス使用

将叅テ候フト云ヘハ、守其ノ遣戸ヲ開テ此チヘ入レヨト云ヘハ遣戸ヲ開ルヲ、清廉見遣レハ灰毛班ナル猫ノ長一尺許ナルカ眼ハ赤クテ虎珀ヲ磨キ入タル様ニテ大音ヲ放テ鳴ク、只同様ナル猫五ツ次キテ入ル、其時ニ清廉目ヨリ大ナル涙ヲ落シテ守ニ向テ手ヲ摺テ迷フ、而ル間五ツノ猫壺屋ノ内ニ離レ入テ清廉カ袖ヲ聞キ此ノ角彼ノ角ヲ走リ行クニ清廉氣色只替リニ替テ難堪氣ニ思タル事无限シ、守此レヲ見ルニ、糸惜ケレハ侍ヲ呼ヒ入レテ皆引出サセテ遣戸ノ許ニ縄ヲ短クテ繋セツ、其ノ時ニ五ツノ猫ノ鳴合タル音耳ヲ響カス、清廉汗水ニ成テ目ヲ打叩テ生タルニモ非ス氣色ニテ有レハ、守然ハ官物不出サシヤト何カニ今日其ノ切テムト云ヘハ、清廉无下ニ音替リテ篩々フ云ク、只仰セ事ニ随ハム何ニモ命ノ候ハムソ後ニモ辨メモ候ヘキト、其時ニ守侍ヲ呼テ然ハ硯ト紙ト取テ持来ト云ヘハ、侍取テ持来タリ、守其レヲ清廉ニ指取セテ可成キ物ノ負ハ既ニ五百七十餘石也、其レヲ七十餘石ハ家ニ返テ笇ヲ置テ吉ク計ヘテ可成キ也、五百石ニ至テ慥ニ下文ヲ成セ、其ノ下文ヲハ伊賀ノ國ノ納所ニ可成キニ非此ク許ノ心ニテ虚下文モソ為ル、然レハ大和國ノ宇陀ノ郡ノ家ニ有ル粨米ヲ可下キ也其ノ下文ヲ不書ヌハ亦有ツル様ニ猫ヲ放チ入レテ、輔公ハ出ナム然テ壺屋ノ遣戸ヲ外ヨリ封結ニ籠テ出ナムト云ヘハ清廉只我カ君我カ君然テハ清廉ハ暫クモ生テハ候ヒナムヤト云テ、手ヲ摺テ宇陀ノ郡ノ家ニ有ル粨米籾三種ノ物ヲ五百カ方ニ下文ヲ書テ守ニ取ラセツ、其ノ時ニ守下文ヲ取ツレハ清廉ヲハ出シツ下文ヲハ郎等ニ持セテ清廉ヲ具シテ宇陀ノ郡ノ家ニ遣テ、下文ノマヽニ悉ク下セテ慥ニナム取テケル、然レハ清廉カ猫ニ恐ルヲ鳴呼ノ事ト見

ツレトモ、大和ノ守輔公ノ朝臣ノ為ニハ極メタル要事ニテナム有ケルト、其ノ時ノ人云繚テ世擧テ咲合ヘリトナム語リ傳ヘタルトソ也、

吾妻鏡（三）元暦元年四月六日、池前大納言并室家之領等者、載平氏没官領注文、自公家被下云云、而為酬故池禪尼恩徳、申宥彼亜相勅勘給之上、以件家領三十四箇所、如元可為彼家管領之旨、昨日有其沙汰、令辭之給、此内於信濃國諏方社者、被相博伊賀國六箇山云云、

池大納言沙汰、
走井荘（河内、）　長田荘（伊賀、）　野俣道荘（伊勢、）
木造荘（同、）　石田荘（播磨、）　建田荘（同、）
由良荘（淡路、）　弓削荘（美作、）　佐伯荘（備前、）
山口荘（但馬、）　矢野領（伊豫、）　小嶋荘（阿波、）
大國荘（駿河、）　香推社（筑前、）　安冨領（同、）
三原荘（筑後、）　球磨臼間野荘（肥後、）
右荘園拾七箇所、載没官注文、自於院所給預也、然而如元為彼家沙汰、為有知行、勤状如件、
壽永三年四月五日、

池大納言家沙汰、
布施荘（播磨、）　石作荘（同、）　六人部荘（丹波、）
兵庫三箇荘（攝津、）　熊野荘（加賀、）　真清田荘（尾張、）
服織荘（駿河、）　宗像社（筑前、）　三箇荘（同、）
國冨荘、
已上八條院御領、　諏訪社、（信濃、被相博伊賀六箇山了）
麻生大和田領（河内、）
已上女房御領、

東京圖書館

ガラス使用

右莊園拾陸箇所注文如此、任本所之沙汰、彼家如元爲有知行、勅状如件、

壽永三年四月六日、

○令集解（十二戸）戸婚律云、在官侵奪私園圃者、一段以下笞卅、

日本紀（二十五孝德）大化元年九月甲申、遣使者於諸國、錄民元數、仍詔曰、自古以降、每天皇時、置標代民、垂名於後、其臣連等、伴造國造、各置己民、恣情駈使、又割國縣山海林野池田、以爲己財、爭戰不已、或者兼并數萬頃田、或者全無容針少地、及進調賦時、其臣連伴造等、先自收斂、然後分進、脩治宮殿、築造園陵、各率己民、隨事而作、易曰、損上益下、節以制度、不傷財、不害民、方今百姓猶乏、而有勢者、分割水陸、以爲私地、賣與百姓、年索其價、從今以後、不得賣地、勿妄作主、兼并劣弱、百姓大悦、

同（二十九天武）四年二月己丑、詔曰、甲子（○天智三年）年、諸氏被給部曲者、自今以後除之、親王諸王及諸臣、并諸寺等、所賜山澤嶋浦、野阪池、前後並除焉、

同（二十九天武）五年五月、是月、勅禁南淵山、細川山、並莫蒭薪、又畿內山野、元所禁之限、莫妄燒折、

令（十雜）凡國內有出銅鐵處、官未採者、聽百姓私採、（謂文云、官未採、即採之後、百姓不可私採、）若納銅鐵、折充庸調者聽、自餘非禁處者、山川藪澤之利、公私共之、

續日本紀（三文武）慶雲三年三月丁巳、詔曰、軒冕之羣、受代耕之祿、有秩之類、无妨於民農、故召伯所以憩甘棠、公休由其拔園葵、頃者王公諸臣、多占山澤、不事耕種、競懷貪婪、空妨地利、若有百姓採柴草者、仍奪其器、令大辛苦、加以被賜地、實止有一二畝、由是踰峯跨谷、浪爲境界、自今以後、不不得更然、但氏氏祖墓及百姓

東京圖書館

東京圖書館

宅邊栽樹爲林、并周二三十許歩、不在禁限、（○又見類聚三代格十六）

〔同五元明〕和銅四年十二月丙午、詔曰、親王已下、及豪強之家、多占山野、妨百姓業、自今以来、嚴加禁斷、但有應墾開空地者、宜經國司、然後聽官處分、

〔同三十八桓武〕延暦三年十二月庚辰、詔曰、山川藪澤之利、公私共之、具有令文、如聞、比来或王臣家及諸司寺家、包并山林、獨專其利、是而不禁、百姓何濟、宜加禁斷、公私共之、如有違犯者、科違勅罪、所司阿縱、亦與同罪、其諸氏冢墓者、一依舊界、不得斫損、

〔同四十桓武〕延暦十年六月甲寅、先是去延暦三年下勅、禁斷王臣家、及諸司寺家等、專占山野之事、至是遣使山背國、勘定公私之地、各令有界、恣聽百姓、無失其利、若有違犯者、科違勅罪、其所司阿縱者、亦與同罪、

〔類聚三代格十六〕太政官符、

東京圖書館

寺并王臣百姓山野藪澤濱嶋盡收入公事、

右被右大臣宣偁、奉勅、准令山川藪澤、公私共利、所以至有占點先頻禁斷、如聞、寺并王臣家、及豪民等、不憚憲法、獨貪利潤、廣包山野、兼及藪澤、禁制蒭樵、奪取鎌斧、慯法蠹民、莫過斯甚、自今以後、更立嚴科、不論有官符賜、及舊来占買、並皆收還、公私共之、墾田地者、未開之間、所有草木、亦令共採、但元来相傳、加功成林、非民要地者、量主貴賤、五町以下、作差許之、墓地牧地、不在制限、但牧无馬者亦從收還、其京城側近高顯山野、常令衛府守、及行幸經過、顯望山岡、依舊不改、莫令斫損、此等山野並具録四至、分明牓示、不得因此濫及遠處、仍國郡官司、專當糺察、如慣常不悛、違犯此制者、亦六位以下、科違勅罪、五位已上、及僧尼神主等、録名申上、仍聽投彼使人、申送所司、登時示衆、決罸以懲将来、若所司阿縱、即同違敕坐、要路牓示、普令知見、其入公并聽許等地數具

錄申官、不得踈畧、

延暦十七年十二月八日、

日本後紀（八桓武）延暦十八年十一月甲寅、備前國言兒嶋郡百姓等、燒鹽爲業、因備調庸、而今依格、山野濱嶋、公私共之、勢家豪民、競事妨奪、強勢之家彌榮、貧弱之民日弊、伏望任奪給民、勅、秉勢迫貧、事乖共利、宜加禁制、莫令更然、

類聚國史（百八十桓武）延暦十九年四月丁丑、勅、山藪之利、公私須共、是以屢下明制、重禁專租、而伊賀國不顧朝憲、王臣豪民、廣占山林、不許民採、國郡官司、知而不禁、妨民奪利、莫過於斯、若慣常不悛、科處如法、宜準去十七年格、盡收還公、令百姓共其利、但東西二寺、稱構堂宇、其巨樹直木、特聽禁斷、

日本後紀（十四平城）大同元年閏六月□□、勅、王臣神寺占山河海嶋濱野林原等者、從乙亥年暨于延暦廿年、一百廿七歲之間、或頒詔旨、或下格符、數□兼占、頻斷獨利、加以氏氏祖墓、及□姓宅邊、栽樹爲林、□寺所許步數、具有明文、又五位已上、六位已下、及僧尼神主等、違犯之類、復立科法、今山陽道觀察使參議正四位下守皇太弟傳藤原朝臣園人言、山海之利、公私可共、而勢家專點、絕百姓活、愚吏阿容、不敢陳正、頑民之亡、莫過此甚、伏望依慶雲三年詔旨、一切停止者、今如所言、則知徒設憲章、曾无遵行、率由所司阿從、而令百姓有妨、宜一切收入、公私共之、若有犯者、依延暦年中格、一无所宥、自今已後、立爲恒例、但山岳之體、或於國爲礼、漆菓之樹、觸用亦切、事須蕃茂、並勿伐損、其菓實□復宜相共、又山城國葛野郡大井山者、河水暴流、則堰堤淪沒、採材遠處、還失灌溉、因茲國司等量便禁制、河邊无令他斫、諸國若有斯類者、不論公私、不在收限、其語寄有要、輙占无要者、事覺之日、必處重科、（○又見類聚三代格十六）

ガラス使用

〈類聚三代格十六〉太政官符
應盡收入公勅旨并寺王臣百姓等所占山川海嶋濱野林原等事、
右件撿案內、從乙亥年、曁于延曆廿年、一百廿七歲之間、或須詔旨、或下格符、數禁占兼、頻斷獨利、加以氏々祖墓及百姓宅邊栽樹爲林等、所許步數、具在明文、又五位以上、六位以下、及僧尼神主等違犯之類、復立科法、今山陽觀察使正四位下守皇太子傅兼行宮內卿勳五等藤原朝臣園人解偁、山海之利、公私可共、而勢家專點、絕百姓活、愚吏阿容、不敢諫止、頑民之亡、莫過此甚、伏請依慶雲三年詔旨、一切停止、謹請處分者、右大臣宣、奉勅、今如所申則知、徒設憲章、曾無遵行、率由所司阿縱、而令百姓有妨、宜一切收入公私共之、若有犯者、依延曆十七年十二月八日格行之、一無所宥、自今以後、立爲恒例、但山岳之體、或於國爲禮、漆菓之樹、觸用亦切、事須蕃茂並勿伐損、其菓實者、復宜相共、山城國葛野郡大井山者、河水暴流、則堰壞淪沒、採材遠處、還失灌漑、因茲國司等量便禁制、河邊無令他斫、諸國若有斯類者、不論公私、不在收限、其寄語有要、輙占无要者、事覺之日、必處重科、

大同元年閏六月八日

〈類聚三代格十六〉太政官符
合四箇條事、
一氏々祖墓及百姓栽樹爲林等事、
右件案太政官今年閏六月八日、下五畿內七道諸國符偁、氏氏祖墓及百姓宅邊栽樹爲林等、所許步數、具存明文者、去慶雲三年三月十四日詔旨偁、氏々祖墓及百姓宅邊栽樹爲林、并周二三十許步、不在禁限者、又去延曆十七年十二月八日格偁、元来相傳、加功成林、非民要地者、量主貴賤、五町已下、作

ガラス使用

差許之、墓地牧地、不在制限、但牧无馬者亦從收還、若以嶋為牧者、除草之外、勿妨民業、又入公并聽許等地數、具錄申官者、斯則官符所謂明文更无、有疑（要畧六十）○又見政事

一原野事、

右件依同前符、公私可共案、和銅四年十二月六日詔旨偁、親王已下、及豪強之家多占山野、妨百姓業、自今已後、嚴加禁制、但有應墾開空閑地者、宜經國司、然後聽官處分者、然則除民要地之外、不要原野空地者、須聽官處分、偏不可拘无用之土、

一山岳於國為禮事、

右同前符偁、山岳之體、於國為禮、又如山城國葛野郡大井山等類、並勿伐損者、須國司親巡歴覧山岳、撿錄四至、分明牓示、勿令百姓疑滯、鬱結彼心、

一漆菓事、

右同前符偁、漆菓之樹、觸用亦切、事須蕃茂、並勿伐損、其菓實者、復宜相共者、夫桑漆二色、依例載朝集帳、一戶三百根已上、宜任戶內、若有剩餘、亦相共之、但宅邊側近、元來加功栽栗為林者、准上條量貴賤許之、務從折中、（要略六十）○又見政事

以前、得七道觀察使解偁、今聞諸國司等、官符到日、施行諸郡、郡司下知鄉邑、而後相俱黙尒、曽无爭指示、然則百姓之愚、可共樂成、或暗栽麦、何曉符旨、理須國司案撿前後詔旨格符并官符之內所載事類、披捜彼此、發明上下、委曲陳喩、再三教誡、則將黎庶知歸、手足有措、而偏執目前、須聽不聽、常嬾巡撿、可示無示、每下官符、民疑尋問、良宰莅境、豈其如之、伏請下符諸國、每事存限、務加教喩、无數致憂煩、謹請處分者、右大臣宣、依請、

大同元年八月廿五日、

ガラス使用

〔同十二〕太政官符、

一應禁制斫損水邊山林事、

右得大和國解偁、産業之務、非只堰池浸潤之本、水木相生、然則水邊山林、必須鬱茂、何者大河之源、其山鬱然、小川之流、其岳童焉、爰知流之細太、隨山而生、夫山出雲雨、河潤九里、山童毛盡、谿流涸乾、謹案太政官去大同元年閏六月八日下五畿内七道諸國符偁、右大臣宣、奉勅、山川海嶋濱野林原等、一切収入、公私共之、但山岳之體、式於國爲礼、事須蕃茂、勿令伐損、又山城國葛野郡大井山者、河水暴流、則堰堤淪没、採材遠處、還失灌漑、囙茲國司量便禁制、河邊諸國若有此類者、不論公私、不在收限者、然則大堰之岳、專有禁制、小川之山、不在禁限、囙茲百姓、憚遠貪近、川上山林、任意伐採、至有旱年、漑之苗焦、動遺損害、職此之由也、望請川谿泉源溝池等、縱漑田水邊山

林藪澤、不問公私、悉加禁制、並莫伐損、謹請處分者、依請、

一應禁制斫損路邊樹木事、

右同前解偁、道邊之木、夏垂蔭爲休息處、秋結實民得食焉、而或頑民徒致伐損、去來之輩、並失便、望請特加禁制、莫令更然者、依請、

以前右大臣宣、奉勅、如件、諸國宜准此、

弘仁十二年四月廿一日

〔文德實録二〕嘉祥三年四月癸酉、宣詔、山野之禁、本爲鶉雉、至於草木、非有所制、如聞所由、不熟事意、矯峻法禁、奪人斧斤、捕人牛馬、絶其往還之跡、妨其樵蘇之業、爲人之患、莫此之甚、宜早下知、莫令更然、又聞豪貴之家、非有官符、妄占山野、多妨民利、如斯之類、並早禁斷、其江河池沼之類、同亦准此、莫致人愁、牓示路頭、普令知見、

ガラス使用

〔類聚三代格十六〕太政官符、

應禁制山野不失民利事、

右被右大臣宣偁、山野之禁、元為鶉鴙、至於草木、無所禁制、如聞、所由、不顧事意、矯峻法禁、奪人鎌斧、執人馬牛、以絶往還之蹊、亦失樵蘓之業、為人之患、莫此之甚、宜早下知、莫令更然、又聞、或公或私、非有官符、妄占山野、多妨民利、如斯之類、並早禁制断、若猶不肯者、具狀言上、随即科處、其江河池沼之類、同亦准此、莫致人愁者、宜牓示路頭、普令知見、

〔同十六〕太政官符、

應禁制諸院諸宮及王臣家占固山川藪澤事、

右延暦三年十二月十九日、騰勅符偁、山川藪澤之利、公私共之、比来王臣及諸司寺家等、包并山林、經畧藪澤、宜加下知、勿使更然、其所占之地、不論先後、皆悉還公、如有違犯者、科違勅罪、職國

司等阿縱、不禁、亦与同罪、其諸氏家墓者、一依舊堺、不得斫損者、而立制已久、犯禁弥甚、良由國司相容、不守皇憲、左大臣宣、奉勅、宜重加下知、早從停止、若有違犯之輩者、科罪還公、一如前符、且罰不在重、人畏立决、其稱使占固者、不論蔭贖、决杖六十、若國司不遵行、為人被告者、解却見任、以懲將来、仍須官符到後百日内辨行、具狀言上、

延喜二年三月十三日、

〔同十六〕太政官符、

應禁止公私點領江河池沼等事、

右江河池沼、有便灌漑者、尤斯農業之儲、田畝之備也、如聞、内膳司進物所、并官家諸人等、或寄事供御固、加禁制、或假名點地、競立牓示、至于農要用水之日、壞堤决水、徒失潤澤之公途、理不可然、大納言正三位兼行右近衞大將源朝臣能有宣、奉勅、宜仰

ガラス使用

國司不論公私抱從禁止事在利民不得隱忍、

寛平四年五月十五日、

〔東大寺小攝文書下〕坂井郡溝江莊所使解申請溝所事、

合應堀溝六百一十五丈（廣六尺深三尺）應受坂井郡五百、

原堰水應堀百姓之口分中大畔四百卅五丈可損百姓田

一段七十五歩、（溝内三尺即畔二邊立置三尺、）

應堀右大臣家田中大畔卅丈可損田卅歩、（溝内三尺即畔廣充二邊立置三尺、）

應堀五百原溝副一百五十丈、（无損田、）

以前溝所請如件、仍注具狀申送謹解、

天平神護二年十月八日、　佃使僧漸敬、

僧行鈞、

〔同下〕江沼郡幡生莊使解　申百姓等障溝事、

野川溝二通、（常田開時溝者、）

荒廢田十三町、（東北十五條田既荒者、）

以前溝障不漑依玆件田既荒廢、仍具□狀申送、謹解、

天平神護二年十月七日、

莊司僧慚敬、

僧行尚、

ガラス使用

屯倉

屯倉ハ、ミヤケト訓シテ、御宅ノ儀ナリ、是其稱タル、後世ニ所謂政所ノ如クニシテ、事ヲ執ル所ヲ統稱スルナリ、因リテ内屬ノ國ニモ渉リテ、三韓ヲ内官家（ウチツミヤケ）渡屯家（ワタツミヤケ）ト云ヘリ、然レドモ填スルニ、屯倉ノ字ヲ以テシタル者ハ、專ラ其所領ノ田ヨリ獲ル所ノ倉廩ヲ云ヒテ、廣ク其所在ノ地ヲ包ネタリ、屯ハ、𥬠字ニ通シテ、穀ヲ盛ル器ナルヲ以テ、借リテ倉廩トシタルナリ、又屯倉ハ、皇后皇妃皇太子之妃等ノ名ヲ、後世ニ傳ヘシタメニ設ケタル者アリ、所謂御名代ナリ、蓋シ上世ハ、朝廷ト臣下トヲ問ハズ、貴人ノ田莊ヲ汎テ屯倉ト稱セシコト、日本紀ニ、縣主等ガ己カ屯倉ヲ獻リシ文アルト、東大寺文書ニ、其寺ノ莊園ヲ指シテ、三宅ト云ヘルニテ知ルヘシ、而シテ其田ヲ屯

田ト云ヒ、訓シテミタト云ヘリ、又御宅田（ミヤケダ）ノ稱アリ、即チ屯倉ニ屬セル田ニシテ御田ナリ、屯田モ亦官田ト貴人ノ田トニ渉ル、屯倉ニハ田部アリ、屯田ヲ佃スル民ヲ云フ、钁丁ト云フモ是ナリ、亦田令アリ、又田使（タツカヒ）ニ作ル、屯田ノ收獲ヲ掌ル者ニテ、亦朝廷ニ限レルニアラズ、而シテ屯倉首ト云ヘルモ、亦田令ノ類ナラン、田莊モ亦屯倉ナリ、訓シテタドコロ、又ナリドコロト云フ、是ハ官田ヲ除キ、皇親以下ノ地ニ限ル、ナリドコロノナリハ、ナリハヒノナリニシテ、產業ヲ云フナリ、而シテ別業ニモナリトコロノ訓アリ、要スルニ屯倉ト云ヒ、田莊ト云ヘルハ、即チ莊園ナリ、而ルニ孝德天皇ノ世ニ至リ、屯倉田莊屯田ハ、一概ニ廢セラレシモ、後ニ墾田ヲ聽シテヨリ、莊園ノ事復、日ニ滋盛ニシテ、其勢終ニ防遏ス

ベカラズ、猶莊園部官田部ヲ參看スベシ、

〔釋日本紀十述義〕屯倉、兼方案之、天子之米廩也、

〔段注說文〕𥬠 篅也、（廣韵篅、篴也、按今俗謂盛穀高大之器、曰土篴、）从竹屯聲（徒損切）
篅 㠯判竹（句、謂用析竹爲之也、）圜㠯盛穀者、（用竹簟圜其外、殺其上、高至於屋蓋、以盛穀、近底之處爲小戶、常閉之、可出穀、今江蘇謂之土篴、是也、古曰篅、今江蘇編稻艸爲之、容數石、謂之𥬠、淮南書曰、典守其篅𥬠、注、篅𥬠受穀器也、篅讀顓孫之顓、按別作圌、）从竹耑聲（市緣切）

〔急就篇注〕𥬠篅皆所以盛米穀也、以竹木簟席若泥塗之、則爲𥬠、𥬠之言屯也、物所屯聚也、織艸而爲之、則曰篅、取其圓團之狀也、

〔張邱建算經下〕今有圓圌、上周一丈八尺、下周二丈七尺、高一丈四尺、問受幾何、

答曰、三百六十九斛四㪷九分㪷之四、

術曰、上下周相乘、又各自乘、併以高乘之、以三十六而一、所

得為實、實如斛法而一得斛數、

草曰、置上周一丈八尺、自相乘得三百二十四尺、以下周二丈七尺、自相乘得七百二十九尺、又上下周相乘得四百八十六尺、併三位得一千五百三十九、又以高一丈四尺乘之得二萬一千五百四十六尺、以三十六除之得五百九十八尺五寸為實、以斛法除之得三百六十九斛四㪷餘與法各折半皆以九除之法得九餘得四即合前問

〔緝古算經〕假令圓囷上小下大、斛法二尺五寸、以率經一周三、上下周差一丈二尺、高多上周一丈八尺、容粟七百五斛六斗、今已運出二百六十六石四斗、問殘粟去口上下周高各多少、

答曰、

上周一丈八尺、

下周三丈、

高三丈六尺、

去口一丈八尺、

粟周二丈四尺、

求圓囷上下周及高術曰、以斛法乘容粟、又三十六乘之、三而一、為方亭之積、又以周差自乘三而一、為隅陽冪、以乘截高以減亭積餘為實、又周差乘截高加隅陽冪為方法、又以周差加截高為廉法從開方方除之得上周加差而合所問、

求粟去口術曰、以斛法乘出斛三十六乘之以乘高冪如周差冪而一為實、高乘上周周差而一為小高、今自乘三之為方法、三因小高為廉法、從開立方除之即去口（三十六乘訖即是截方亭之前方窖不別）置去口以周差乘之以本高除之所加上周即粟

東京圖書館

ガラス使用

ミヤケ

周

〔東大寺小櫃文書〕東大寺越前國桑原莊券（雜文書）

天平寶字元二、（○以上係外題）

越前國使等解　申桑原莊所應堀開溝并度樋等事、（○中略）

天平寶字元年十一月十二日、

越前國使等解　申請司裁事、

合坂井郡桑原三宅收納稻事、（○中略）

天平寶字元年十二月廿三日、

按スルニ、一ニ桑原莊ト云ヒ、一ニ桑原三宅ト云フ、莊ノ以テミヤケト訓スヘキコト知ルベシ、

〔續修東大寺成卷文書二十五〕謹解申稻直請錢事、

合肆佰文、　代可進稻伍拾束、

右限來十月卅日、足羽郡草原三宅進上、仍事狀注以謹解、

天平寶字二年七月十五日田使秦忌寸廣人

按スルニ、足羽郡ハ、越前國ニ屬シ、草原鄕ニ東大寺ノ莊アリ、

以三宅為地名

〔和名類聚鈔六〕武藏國橘樹郡御宅、（美也介）

〔同八〕備前國兒島郡三家、（美也希）

〔同六〕大和國城下郡三宅、（美也介）

以三宅為姓

〔新撰姓氏錄八攝津國皇別〕三宅人、　大彥命男波多武日子命之後也、

〔同二十四左京諸蕃下〕三宅連、　新羅國王子天日桙命之後也、

屯田

〔日本紀六垂仁〕九十九年、田道間守、是三宅連之始祖也、

〔同十一仁德〕是時額田大中彥皇子、將掌倭屯田（ミタ）及屯倉（ミヤケ）、而謂其屯田司出雲臣之祖淤宇（オウ）宿禰曰、是屯田者、自本山守地、是以今吾將治矣、爾之不可掌、時淤宇宿禰啓于皇太子、皇太子謂之曰、汝便

東京圖書館

啓大鷦鷯尊、於是淤宇宿祢啓大鷦鷯尊曰、臣所任屯田者、大中彦皇子距不令治、大鷦鷯（尊）問倭直祖麻呂曰、倭屯田者、元謂山守地、是如何、對言、臣之不知、唯臣弟吾子籠知也、適是時吾子籠遣於韓國而未還、爰大鷦鷯尊謂淤宇曰、爾躬往於韓國、以喚吾子籠、其兼日夜而急往、乃差淡路之海人八十、為水手、爰淤宇往于韓國、即率吾子籠而來之、因問倭屯田、對言、傳聞之、於纏向玉城宮御宇天皇之世、科太子大足彦尊、定倭屯田也、是時勅旨、凡倭屯田者、毎御宇帝皇之屯田也、其雖帝皇之子、非御宇者不得掌矣、是謂山守地、非之也、時大鷦鷯尊遣吾子籠於額田大中彦皇子、而令知狀、大中彦皇子、更無如何焉、乃知其悪、而赦之勿罪、

同（六垂仁）二十七年、興屯倉于來目邑、（屯倉、此云弥夜氣、）

同（七景行）五十七年十月、令諸國興田部屯倉、

古事記（中景行）此之御世、定田部、（中畧）又定倭屯家、

日本紀（八仲哀）二年二月、定淡路屯倉、

古事記（中仲哀）此之御世、定淡道之屯家也、

日本紀（十一仁徳）十三年九月、始立茨田屯倉、因定舂米部、

古事記（下仁徳）役秦人作茨田堤及茨田三宅、

播磨風土記（餝磨郡）貽和里、（中畧）所以稱餝磨御宅者、大雀天皇（○仁徳）御世、遣人喚意伎出雲伯耆因幡但馬五國造等、是時五國造、即以召使為水手而向京之、以此為罪、即退於播磨國令作田也、此時所作之田、即号意伎田出雲田伯耆田因幡田但馬田、即彼田稲收納之御宅、即号餝磨御宅、又云賀和良久三宅、

日本紀（十八安閑）二年五月甲寅、置筑紫穗波屯倉、鎌屯倉、豐國滕碕屯倉、桑原屯倉、肝等屯倉、大拔屯倉、我鹿屯倉、火國春日部屯倉、播磨國越部屯倉、牛鹿屯倉、備後國後城屯倉、多禰屯倉、來履屯倉、

葉稚屯倉、河音屯倉、婀娜國膽殖屯倉、膽年部屯倉、阿波國春日部屯倉、紀國經湍屯倉、河邊屯倉、丹波國蘇斯岐屯倉、近江國葦浦屯倉、尾張國間敷屯倉、入鹿屯倉、上毛野國緑野屯倉、駿河國稚贄屯倉、　九月丙午、詔櫻井田部連、縣犬養連、難波吉士等、主掌屯倉之税、

同（十八宣化）元年五月辛丑朔、詔曰、食者天下之本也、黄金萬貫不可療飢、白玉千箱何能救冷、夫筑紫國者、遐邇之所朝届、去来之所關門、是以海表之國、候海水以来賓、望天雲而奉貢、自胎中之帝、洎于朕身、收藏穀稼、蓄積儲糧、遥設凶年、厚饗良客、安國之方、更無過此、故朕遣阿蘇仍君、加運河内國茨田郡屯倉之穀、蘇我大臣稲目宿禰、宜遣尾張連、運尾張國屯倉之穀、物部大連麁鹿火、宜遣新家連、運新家屯倉之穀、阿倍臣、宜遣伊賀臣、運伊賀國屯倉之穀、脩造官家那津之口、其筑紫肥豐三國屯倉散在縣隔、運輸遣阻、儻如須要、難以備卒、亦宜課諸郡分移、聚建那津之口、以備非常、永為民命、早下郡縣、令知朕心、

同（十九欽明）十六年七月壬午、遣蘇我大臣稲目宿禰、穗積磐弓臣等、使于吉備五郡、置白猪屯倉、

同（二十二推古）十五年冬、毎國置屯倉、

萬葉集鈔　備中國風土記云、賀夜郡松岡去岡東南維二里、驛路有今新造御宅、奈良朝廷、（武）聖武以天平六年甲戌、國司從五位下勲十二等石川朝臣賀美、郡司大領從六位上勲十二等下道朝臣人主、少領從七位下勲十二等薗臣五百國等造始云云、

日本紀（七景行）五十七年十月、令諸國興田部屯倉、

古事記傳（二十六）田部ハ、多辨と訓べし、（タノベと、ノを添へて訓ムハ非なり、）凡て某部と云ふ、之也（云ハ、）和名抄、長門國、筑前國なと乃郷名の田をさをさ見えず、部にも、多倍と訓りけて田部也云物ハ役て〻、屯家乃御田

を佃（ツク）らしむる料に定置けし民の部（ムレ）なり、そハ尋常（ヨノツネ）の如く、其田を己（オノ）が田として佃（ツク）りて、租税（チカラ）を出すにハ非ず、公（オホヤケ）の御田は役（エダチ）て佃（ツク）るなり、是漢國の古へに、いはゆる井田の法とて、公田を耕（ツク）らしと似たり、されバ其御田に出来たる稲ハ、みながら屯家（ミヤケ）に収めるなり、かくて田部の佃（ツク）れる労（イタツキ）の代（シロ）にハ、其内を分て賜へなる、或ハ免（ユル）さる事などあるまし、ろ、さる細（コマカ）なる事どもハ知りがたうし、

和名類聚鈔（八）長門國豊浦郡田部（多倍）

同（九）筑前國早良郡田部（多倍）

日本紀（十一仁徳）四十三年九月庚子朔、依網屯倉阿弭古捕異鳥、獻於天皇、

按スルニ、阿弭古ハ、恐ラクハ屯倉ノ田令ナラン、

播磨風土記（揖保郡）枚方里（○中略）佐岡所以名佐岡者、難波高津宮天皇（○仁徳）之世、召筑紫田部、令墾此地之時、常以五月、集聚此岡飲酒宴、故曰佐岡、

日本紀（十五清寧）二年十一月、依大嘗供奉之料、遣於播磨國司山部連先祖伊典来目部小楯於赤石郡縮見屯倉首忍海部造細目新室、見市邊押磐皇子子億計弘計、

同（十八安閑）二年九月丙午、詔櫻井田部連縣犬養連難波吉士等、主掌屯倉之税、

同（十九欽明）十七年七月己卯、遣蘇我大臣稲目宿祢等於備前兒嶋郡、置屯倉、以葛城山田直瑞子（ミツコ）為田令（タツカヒ）、（田令、此云陀豆歌毗）十月、遣蘇我大臣稲目宿祢等於倭國高市郡、置韓（アヤ）人大身狭屯倉、（言韓人者百済也）高麗人小身狭屯倉、紀伊國置海部屯倉、（一本云、以處處韓人為大身狭屯倉田部、高麗人為小身狭屯倉田部、是即以韓人高麗人為田部、故因為屯倉之號也）

同（十九欽明）三十年正月辛卯朔、詔曰、量置田部、其来尚矣、年甫十餘、脱籍免課者衆、宜遣膽津（イツ）（膽津者、王辰爾之甥也）撿定白猪田部丁籍、四月、膽津撿閲白猪田部丁者、依詔定籍、果成田戸、天皇嘉膽津定籍之功、賜姓為白猪史、尋拜田令、為瑞子之副、（瑞子見上）

同（二十敏達）三年十月丙申、遣蘇我馬子大臣於吉備國、增益白猪屯倉與田部、即以田部名籍、授于白猪史膽津、

東大寺小櫃文書越前國田使解申勘受官物事、
桒原莊水田幷雜物等、
右税帳所載一物已上如□□□□□□□□
今具錄狀申送以解、
天平寶字二年三月二日、阿刀僧、
田使散位正六位上尾張連古萬侶、
主典蔦井連、

為后妃立屯倉

日本紀（十七繼體）八年正月、太子妃春日皇女晨朝晏出、有異於常、太子意疑、入殿而見、妃臥床涕泣、惋痛不能自勝、太子怪問曰、今旦涕泣、有何恨乎、妃曰、非餘事也、唯妾所悲者、飛天之鳥、為愛養兒、樹巔作巢、其愛深矣、伏地之蟲、為護衞子、土中作窟、其護厚焉、乃至於人、豈得無慮、無嗣之恨、方鍾太子、妾名隨絶、於是太子感痛、而奏天皇、詔曰、朕子麻呂古、汝妃之詞、深稱於理、安得空爾無答慰乎、宜賜匝布屯倉、表妃名於萬代、

同（十八安閑）元年七月辛巳朔、詔曰、皇后雖同體天子、而內外之名殊隔、亦可以充屯倉之地、式樹椒庭、後代遺跡、迺差勅使、簡擇良田、勅使奉勅、宣於大河內直味張（更名里撥）曰、今汝宜奉進膏腴雌雉田、味張忽然恡惜、欺誑勅使曰、此田者、天旱難溉、水潦易浸、費功極多、收獲甚少、勅使依言復命無隱、　閏十二月壬午、行幸於三嶋、大伴大連金村從焉、天皇使大伴大連問良田於縣主飯粒、縣主飯粒、慶悅無限、謹敬盡誠、仍奉獻上御野、下御野、上桒原、下桒原、幷竹村之地、凡合肆拾町、大伴大連奉勅宣曰、○（中畧）今汝味張率土幽微百姓、奉惜王地、輕背使乎宣旨、味張自今以後、勿預郡司、○（中畧）於是大河內直味張、恐畏永悔、伏地汗流、啓大連曰、愚蒙百

東京圖書館

ガラス使用

姓罪當萬死、伏願每郡以钁丁、春時五百丁、秋時五百丁、奉獻天皇、子孫不絶、藉此祈生、永為鑒戒、別以狹井田六町、賂大伴大連、蓋三島竹村屯倉者、以河内縣部曲為田部之元、於是乎起、

同（十八安閑）元年十月甲子、天皇勅大伴大連金村曰、朕納四妻、至今無嗣、萬歲之後、朕名絶矣、大伴伯父、今作何計、每念於茲、憂慮何已、大伴大連金村奏曰、亦臣所憂也、夫我國家之王天下者、不論有嗣無嗣、要須因物為名、請為皇后次妃、建立屯倉之地、使留後代、令顯前迹、詔曰、可矣、宜早安置、大伴大連金村奏稱、宜以小墾田屯倉、與每國田部、給貺紗手媛、以櫻井屯倉、（一本云、加貺茅渟山屯倉、）與每國田部、給賜香香有媛、以難波屯倉、與每郡钁丁、給貺宅媛、以示於後、式觀乎昔、詔曰、依奏施行、

同（十二履中前紀）木菟宿禰啓於瑞齒別皇子曰、刺領巾為人殺己君、其為我雖有大功、於己君無慈之甚矣、豈得生乎、乃殺刺領巾、即

日向、使也、夜半臻於石上、而復命、於是喚弟王、以敦寵、仍賜村合屯倉、

古事記（下安康）爾都夫良意美聞此詔命、自參出解所佩兵、而八度拜白者、先日所問賜之女子訶良比賣者侍、亦副五處之屯宅以獻、（所謂五村屯宅者、今葛城之五村苑人也、）

日本紀（十七繼體）二十二年十二月、筑紫君葛子恐坐父誅、獻糟屋屯倉、求贖死罪、

同（十八安閑）元年四月癸丑朔、内膳卿膳臣大麻呂、奉勅遣使求珠伊甚、國造等詣京遲晚、踰時不進、膳臣大麻呂大怒、收縛國造等推問所由、國造稚子直等、恐懼逃匿後宮内寢、春日皇后不知直入、驚駭而顛仆、慚愧無已、稚子直等兼坐闌入罪、當科重、謹專為皇后、獻伊甚屯倉、請贖闌入之罪、因定伊甚屯倉、今分為郡、屬上總國、

ガラス使用

古事類苑稿　東京圖書館

同（十八安閑）元年閏十二月、廬城部連枳莒喩女幡媛偸取物部大連尾輿瓔珞、獻春日皇后、事至發覺、枳莒喩以女幡媛、獻采女丁、并獻安藝國過戸廬城部屯倉、以贖女罪、○（中略）武藏國造笠原直使主与同族小杵、相争國造、經年難決也、小杵性阻有逆、心高無順、密就求援於上毛野君小熊、而謀殺使主、使主覺之、走出詣京言狀、朝廷臨斷、以使主為國造、而誅小杵、國造使主悚喜交懷、不能默已、謹為國家奉置横渟（ヨコヌ）橘花、多氷（オホヒ）倉樔（クラス）四處屯倉、

同（二十五孝德）大化元年八月庚子、拜東國等國司、仍詔國司等曰、○（中略）若有求名之人、元非國造伴造縣稻置、而輙詐訴言、自我祖時領此官家、治是郡縣、汝等國司、不得隨詐便牒於朝、審得實狀而後可申、

同（二十五孝德）大化二年正月甲子朔、賀正礼畢、即宣改新之詔曰、其一曰、罷昔在天皇等所立子代之民、處處屯倉、及別臣連伴造國造村首所有部曲之民、處處田莊、仍賜食封大夫以上、各有差、降三月辛巳、宜罷官司處處屯田、及吉備嶋皇祖母處處貸稻、以其屯田、班賜羣臣及伴造等、又於脱籍寺、入田与山、　壬午、皇太子使使奏請曰、昔在天皇等世、混齊天下而治、及逮于今、分離失業、屬天皇我皇、可牧万民之運、天人合應、厥政惟新、是故慶之尊之、頂載伏奏、現為明神御八嶋國天皇、問於臣曰、其群臣連及伴造國造所有、昔在天皇日、所置子代入部、皇子等私有御名入部、皇祖大兄御名入部、及其屯倉、猶如古代、而置以不、臣即恭承所詔、奉答而曰、天無雙日、國無二王、是故兼并天下、可使万民、唯天皇耳、別以入部及所封民、簡充仕丁、從前處分、自餘以外、恐私駈役、故獻入部五百二十四口、屯倉一百八十一所、

○

同（十一仁德）十一年四月戊寅、詔群臣曰、今朕視是國者、郊澤曠遠而

古事類苑稿　東京圖書館

国立国会図書館　タイトル『古事類苑』 請求記号 卯-2　ガラス使用

田圃少之、且河水橫逝、以流末不駃、聊逢霖雨、海潮逆上、而巷里乘船、道路亦泥、故群臣共視之、決橫源而通海、塞逆流以全田宅、

按スルニ、田宅ハ田及ヒ宅ヲ謂ヘルカ如シ、訓ミテナリトコロト云フ、恐ラクハ誤ナラン、

田家

同〔舒明前紀二十三〕蘇我氏諸族等、悉集為嶋大臣造墓、而次于墓所、爰摩理勢臣壞墓所之廬、退蘇我田家、而不仕、

別業

同〔繼體前紀十七〕天皇父聞振媛顏容姝妙甚有孅色、自近江國高嶋郡三尾之別業、遣使聘于三國坂中井、納以為妃、遂產天皇、

同〔用明二十一〕元年五月、穴穗部皇子陰謀王天下之事、而口詐在於殺逆君、遂與物部守屋大連、率兵圍繞磐余池邊、逆君知之、隱於三諸之岳、是日夜半、潛自山出、隱後宮、（謂炊屋姫皇后之別業、是名海石榴市宮、）

同〔用明二十一〕二年四月、押坂部史毛屎急來、密語大連（〇守屋）曰、今群臣圖、卿復將斷路、大連聞之、即退於阿都、（阿都大連之別業所在地名也、）集聚人為、

〇

內官家
渡官家

同〔神功前紀九〕高麗百濟二國王、聞新羅收圖籍降於日本國、密令伺其軍勢、則知不可勝、自來于營外、叩頭而歎曰、從今以後、永稱西蕃、不絕朝貢、故因以定內官家、是所謂之三韓也、

古事記〔中仲哀〕百濟國者、定渡屯家、

日本紀〔繼體十七〕二十三年三月、遣物部伊勢連父根吉士老等、以津（〇加羅國多沙津、）賜百濟王、於是加羅王謂勅使云、此津從置官家以來、為臣朝貢津涉、安得輒改賜隣國、違元所封限地、

同〔欽明十九〕六年九月、百濟造丈六佛像、製願文曰、蓋聞造丈六佛功德甚大、今敬造、以此功德、願天皇獲勝善之德、天皇所用彌移居國、俱蒙福祐、

ガラス使用

古事類苑稿 東京圖書館

〔同十四雄畧〕二十年冬、高麗王大發軍兵、伐盡百濟、爰有小許遺衆、聚居倉下、兵粮既盡、憂泣茲深、於是高麗諸將言於王曰、百濟心許非常、臣毎見之、不覺自失、恐更蔓生、請遂除之、王曰、不可矣、寡人聞、百濟國者日本國之官家（ミヤケ）、所由來遠久矣、又王入仕天皇、四隣之所共識也、遂止之、

〔皇太神宮儀式帳〕初神郡度會多氣飯野三箇郡本記行事 右從纏向珠城朝庭以來、至于難波長柄豐前宮御宇天萬豐日天皇御世、有尓鳥墓村造神庤弖、為雜神政行仕奉支、而難波朝庭天下立評給時仁、以十郷分弖、度會乃山田原立屯倉弖、新家連阿久多督領、礒連牟良助督仕奉支、以十郷分竹村立屯倉、麻續連廣背督領、礒部眞夜手助督仕奉支、同朝庭御時仁、初太神宮司所稱神庤司中臣香積連須氣仕奉支、是人時仁、度會山田原造御厨弖、改神庤止云名弖、号御厨、即号太神宮司支、近江大津朝庭天命開別天皇御代仁、以甲子年小乙中久米勝麻呂仁、多氣郡四箇郷申割弖、立飯野高宮村屯倉弖、評督領仕奉支、即為公郡之、右元三箇郡攝一處太神宮供奉支、所割分由顯如件、

古事類苑稿 東京圖書館

ガラス使用

園地 宅地 地券

園地ハ、其地ノ廣狹ニ隨ヒテ、戸毎ニ均シク給スルナリ、若シ賣ラント欲スルトキハ、所部ノ官司ヲ経テ太政官ニ申牒ス、而シテ絶戸トナレバ、收公スレトモ、戸内ニ一人ナリトモ仍ホ存スルトキハ收公セス、園地ヲ有スル者ニハ、官ヨリ戸ノ上中下ニ從ヒテ、桑漆ヲ課シテ植ヱシメ、之ヲ以テ調貢ス、猶莊園部ヲ參看スベシ、

宅地ヲ賣買スルニモ、所部ノ官司ヲ経ルコト園地ニ同シ、而シテ宅邊ニハ樹ヲ植ウルヲ聽ス、

地ハ、券ヲ以テ證トス、故ニ地ヲ爭フニハ證券ノ分明ナルヲ要シ、券火ニ遭ヘハ、更ニ新券ヲ請ヒ、又賣買スルニモ券ヲ立ルナリ、

〔令三田〕凡給二園地一者、隨二地多少一均給、（謂戸内之口、不レ論二多少一、毎レ人均給、何者則殖二桑漆一者、必於二園地一）

東京圖書館

ガラス使用

故若絶戸還公（謂依下條聽賣園地、即地主存日賣訖者、不可更還、其戸内所貫有一人存者、不別親疎、不為絶戸也、）

按スルニ、義解ノ毎人ハ、毎戸ノ謬ナランヽ、

課桑漆

〈同三田〉凡課桑漆、上戸桑三百根、漆一百根以上、（謂凡戸上中下者、計口多少、臨時量定、其餘條稱上戸中戸等、亦准此例也、）中戸桑二百根、漆七十根以上、下戸桑一百根、漆卌根以上、五年種畢、（謂新別為戸者、亦依此限、其桑漆者、皆於園地種、若無園地者、不在課限也、）郷土不宜、及狭郷者、不必滿數、

〈延喜式二十五主計下〉凡桑漆帳、率戸數有闕者、其帳令殖填、

禁将田宅園地施寺

〈令三田〉凡官人百姓、並不得将田宅園地捨施及賣易與寺、（謂捨施者、猶布施也、賣易者、賣及貿易、但依文、奴婢牛馬等、不在禁限、）

〈續日本紀十六聖武〉天平十八年五月庚申、禁諸寺競買百姓墾田及園地永為寺地、

〈類聚三代格十二〉太政官符、

禁斷京職畿内諸國私作伽藍事、

右奉勅、定額諸寺、其數有限、私自營作、先既立制、比来所司寛縦、曾不糺察、如經年代、無地不寺、自今以後、私立道場、及將田宅園地捨施竝賣易與寺、主典以上解却見任、自餘不論蔭贖、決杖八十、官司知而不禁者、亦與同罪、

延暦二年六月十日、（○又見續日本紀三十七、）

〈同八〉太政官符、

禁斷出擧財物以宅地園圃為質事、

右撿太政官去天平勝寶三年九月四日符偁、宅地為質、皆悉禁断者、今被右大臣宣偁、奉勅、先勅京畿已禁件事、而今京内諸寺、貪求利潤、不畏朝章、以宅取質、迴利為求、非只綱維越法、抑亦官司共許、何其為吏之道、輙違王憲、出塵之輩、更結俗網、宜令天下莫有此類、如有犯者、科以違勅、官人解其見任、財貨没入公家、

ガラス使用

延暦二年十二月五日、（○又見續日本紀三十七、）

〔同十二〕太政官符

禁凡下百姓將田宅園地賣買與寺事、

右案田令云、凡官人百姓並不得將田宅園地捨施及賣易與寺、又天平十八年五月九日符偁、諸寺競買百姓墾田及園地、永為寺地、宜加禁斷、不得為然、如有違犯者、賣買人並依法科罪、又延暦二年六月十日符偁、自今以後、私立道場、及將田宅園地捨施並賣買易與寺、主典以上解却見任、自餘不論蔭贖、決杖八十、官司知而不禁者亦同罪者、被右大臣宣偁、奉勅、如聞、或寺詐附名賓入寺家、如此之類、往々而在、前後雖禁、違犯猶多、此而不肅、豈曰皇憲、宜其承前施捨賣易曰宅園地子細勘録、附使申上、自今以後、復有此類、咸皆沒官、以懲將来、

延暦十四年四月廿七日、（○又見類聚國史七十九、）

〔春記〕長久二年三月十五日、參内仰云、今日關白可參入者、其次可仰事等云々、相次參關白殿申文書、是山城國田原御園愁申事也、彼御園接修理職田杣、仍為四至内可催仕人夫之由、申下宣旨云々、而御園司申云、先例有此事、但山城國司進解、是非被杣四至内之由也、仍被改下宣旨免除已了之宣旨等案并國司申文等同此度進之、仰云、覽可候之、早不可奏聞者、　十七日早旦、參關白殿、（○中略）予申田原事、命云、此事不可有裁許、修理職作事已以可懈怠由云々、公家合力可令行給事也、件御園住人及多々也、一切不叶公役、今依万之一事、令役仕尤可宜事、早成藏人所御牒、可仰其由也者、

○

〔令三田〕凡賣買宅地（謂有舍宅之地也、略擧宅地、田園皆同、其賣買倉屋等者、自須證據分明、不可經官司也、）皆經所部官司、申牒、然後聽之、

東京圖書館

ガラス使用

禁早幼賣田宅

〔同 十雜〕凡家長在、而（謂祖父伯兄之屬、與戸令嫡子為家長其義不同也、）子孫弟姪等、不得輙以奴婢雜畜田宅及餘財物、私自質舉、（謂子孫弟姪等、私用家長物、以其為質舉、而求利也、）及賣、若不相本問違而輙與及買者、依律科罪、（謂科違令罪、即輙與及買者各是別犯、不可為首從、其依律子孫等私輙用財、不滿五端、則無罪法、若為質私舉及輙出賣與者、雖不滿五端、猶亦依此令論之、）

〔續日本紀 三文武〕慶雲三年三月丁巳、詔曰、○（中略）頃者王公諸臣多占山澤、不事耕種、○（中略）自今以後、不得更然、但氏氏祖墓及百姓宅邊栽樹為林、并周二三十許歩、不在禁限、

賜宅地

〔日本紀 三神武〕二年春二月乙巳、天皇定功行賞、賜道臣命宅地、居于築坂邑、以寵異之、

〔引書風土記〕伊勢國風土記云、天日別命、神倭磐余彦天皇、自彼西宮征此東州之時、隨天皇、○（中略）天日別命奉勅東入數百里、其邑有神、曰伊勢津彦、天日別命問曰、汝國獻於天孫哉、答曰、吾覓此國、居住日久、不敢聞命矣、天日別命發兵、欲戮其神、于時畏伏、啓云、吾國悉獻於天孫、吾敢不居矣、○（中略）天日別命壞筑紫國、復命天皇、天皇大歡、詔曰、國宜取國神之名、號伊勢、即為天日別之村地國、賜宅地于大倭耳梨之村焉、（仙覺万葉註釋）

京地宅地制

〔日本紀 二十九天武〕十二年十二月庚午、詔曰、凡都城宮室非一處、必造兩參、故先欲都難波、是以百寮者各往之請家地、

〔同 三十持統〕五年十二月乙巳、詔曰、賜右大臣宅地四町、直廣貳以上二町、大參以下一町、勤以下至無位、隨其戸口、其上戸一町、中戸半町、下戸四分之一、王等亦准之、

〔續日本紀 十一聖武〕天平六年九月辛未、班給難波京宅地、三位以上一町以下、五位以上半町以下、六位以下四分一町之一以下、○（事具皇都部）

〔同 十四聖武〕天平十三年九月己未、遣木工頭智努王四人、班給京都百姓宅地、○（事具皇都部）

東京圖書館

ガラス使用

〔同淳仁二十三〕天平寶字五年正月丁未、使司門衛督正五位上粟田朝臣奈勢麻呂等於保良京、班給諸司史生已上宅地、〇事具皇都部

〔日本紀略桓武〕延暦十二年九月戊寅、遣菅野真道藤原葛野麻呂等、班給新京宅地、

〔三代實録清和二十五〕貞観十六年四月廿七日、有勅、賜親王及源氏新銭三千七百貫、令各買居宅、

〔同陽成三十一〕元慶元年六月九日、先是貞観十三年八月十三日、太政官處分、令唐人崔勝寄住右京五條一坊庶人伴中庸宅地三十二分之八、先是崔勝言、歸化之後二十八年於玆矣、未有立錐地、曾無處身之便、平生之日、無復所愁、身亡之後、妻孥何頼、請永給此宅、以為私居、詔賜之、

〔同陽成四十四〕元慶七年十月廿七日、加賜唐人崔勝居宅地三十二分之二、元是庶人伴中庸沒官之宅地二十二分之十也、元慶元年勅賜崔勝三十二分之八、其遺二分在四至之内、崔勝申請、故賜之、

東京圖書館

遷都賜宅入宮中者物及位

〔續日本紀文武三〕慶雲元年十一月壬寅、始定藤原宮地、宅入宮中百姓一千五百五烟、賜布有差、

〔同聖武十四〕天平十四年正月壬戌、賜家入大宮百姓二十人爵一級、入都内者、無問男女、並賚物、〇事具皇都部

〔同稱徳三十〕寶龜元年正月乙亥、大縣若江高安等郡百姓之宅入由義宮者、酬給其價、〇事具皇都部

〔同桓武三十八〕延暦三年六月丁卯、百姓私宅入新京宮内五十七町、以當國正税四萬三千餘束、（〇四萬、類聚國史八十三作一萬）賜其主、〇事具皇都部

〔同桓武三十八〕延暦四年五月癸丑、先是皇后宮赤雀見、是日詔曰、〇中畧其山背國者、皇都初建、既為輦下、慶賞所被、合殊常倫、今年田租特宜全免、又長岡村百姓家入大宮處者、一同京戸之例、〇皇都部

東京圖書館

ガラス使用

雜載

當ニ糶者一

〔日本紀略 桓武〕延暦十二年三月乙酉、新京宮城之内、百姓地四十四町、給ニ三年價直一、

〔同 桓武〕延暦十二年十二月壬戌、勅、長岡宮百姓宅地價直、不ㇾ可ニ悔返一云云、

〔大鏡 二〕太政大臣基経のおとゞは、○中略御いへは堀川院と閑院とにぞすみ給ひしを、ほり川院をばさるべき事のおりはれ〴〵しきまつりにせさせ給ひ、閑院をぞ御物いみや又うとき人などはまいらぬ所にて、さるべくむつましくなれたる人ばかりを、御供にてわたらせてすませ給ふおはしましける、ほり川院は、地形のいといみじきなり、大饗のおり殿ばらの御車のたちやうなどよ、尊者の御車は川よりひんがしにたてゝ、うしはみえなしのひらきばしらにひきはなちて、かんだちめのくるまをば川よりにしにたてらるゝがめでたきをも、尊者の御車の屋ちかくもとにみゆる事は、ほかには侍らぬ物をやと見給ふるに、ほかの家の院殿にこそあれ、さまことにてもあるめれ、ほり四町にて四面にみちある京中の家も、冷泉院のことこそ思ひはべるかひつまゝ、よのおぼえなるまゝにいみじき事どもこそいく〳〵まうくめれ、

争地以券為證

〔長秋記〕長承元年五月十五日、一、權天文博士安倍兼時與ニ右京亮同泰親一、故晴明領地祭庭論事、泰親訴申云、於ニ件地一六戸主自ニ晴明時一（為）祭亭所ニ奉ニ公家御祭一也、至ㇾ今二百餘歳、他人不ㇾ領ニ知一、就ㇾ中舍兄政文死去時、以ニ件地一所ㇾ分ニ長男童一、其理可ㇾ然、而政文妻以ニ件地一沽ニ却他人一、累代祭庭依ㇾ非ㇾ可ㇾ為ニ他領一、注ニ子細一奏聞、随可ㇾ停ニ止沽却之由宣旨已下了、而兼時買ニ取件地一、欲ㇾ居ニ主己一、是違勅者也、尚

国立国会図書館　タイトル『古事類苑』 請求記号 卯-2　ガラス使用

東京圖書館

任前宣旨、被停止沽却、欲守護件地者、兼時申云、件地非祭亭晴明亡後男女子傳領、其旨見次第分契、兼時一門同時氏長也、隨得兼時譲、何於領知可有其妨哉云々、明法勘申云、如兼時狀觧件地非祭庭、又不経二百餘歳、恣巧無實、経上奏、罪過不軽云々、隨相傳公驗其理顯然也、兼時可領知、但可停止沽却之由宣旨已了、乍知其旨、不経奏聞、恣領知條、雖有違勅犯、又已経恩赦、泰親雖給停止沽却宣旨、無可領知之文、左右同可隨勅定、無實奏聞條、可被問泰親、欲右宰相中將定申云、件地之事、白河院御沙汰當今勅斷也、任前宣旨被停止沽却、政文男成長間、泰親可守護、欲左大辨申云、大畧如右宰相中將定申、但白河院御時有沙汰、刻於家文書泰親給了、於地券泰行給了者、付前宣旨、雖停止他人沽却、於地券泰行可領知、欲左宰相中將任前宣旨、停止沽却、泰行成人間、泰親可守護件地也、此外諸卿皆同左大辨定申、内大臣加定申云、泰行已加元服、學道之由経奏聞、於今可謂成人、欲者泰行領知何事在哉、左兵衛督定申云、沽却停止宣旨下知先了、然而於兼時傳領、何事候哉、後已同氏之為長、隨得泰行譲、是同旁有其理、欲人々念沽却與譲、是同事也云々、

叙宅地数

愚昧記注進淀相撲窪御領住宅并年内雜事等事、

合、

行成一宇、　時道在家叅宇、　國行壹宇、

則清壹宇、　國末壹宇、　成時貳宇、

國利名在家參宇字豊後介貳宇、　行正貳宇、

國元壹宇、　正道貳宇、　延次參宇、

一山畠住人宅、

國末壹宇、　貞重名參宇、　字相撲壹宇、

右件在家所注進如件、抑於所課罷者、被令京注下知旨に無為

東京圖書館

違失者、仍任御注文、以解、

保延元年五月十日、　淀相撲御領住人等、

下司藤并在判、

地券遭火

〔朝野群載（二十一雜文）〕四條令解申請職判事、

請被殊給職判為公驗私領地四戸主狀、

在左京四條三坊九町西三四行北十八內、

右得藤原氏家解狀偁、件地親父故式部大輔藤原朝臣某領也、而相傳領知之後、以去承曆□年□月□日、三條烏丸燒亡之時、舍屋燒失次、件公驗已以燒畢、望請被給職判為末代之公驗者、今加覆審尤有其謂、仍注事狀以解、

年月日

〔同（二十一雜文）〕權中納言家牒　左京職衙、

欲被依實證署領地券文燒失狀、

在右京七條三坊四坊、

（四至、東限佐比大路、南限七條大路、西限京極、并侍從池西堤、北限六條大路、）

牒、件地元者八條大將家所領也、而三條太政大臣家傳領之後、入道大納言家相次領知、其後為內大臣家傳領、數年之間代々券文、以先年四條官燒亡之次、同次燒失畢、而今從內大臣、以地被傳渡於家、又畢、誠為累代公卿之領、古今雖普知、猶尋領地相傳之道、以文契可為本也、仍欲被立券證署之狀、牒送如件、乞衙察狀、牒到准狀、以牒、

長久五年六月十一日、　知家事左衞門使長村重、

書吏大工少屬高忠、

令主計允宗岡、

別當式部權大輔大學頭大江朝臣、知家事大炊屬、

散位、

職判、

古事類苑稿 東京圖書館

依牒状旨与判如件、
寛德元年十二月十七日、（○寛德元年、即長久五年、）
叅議宮内卿兼大夫美依權守源朝臣、少屬中原權大夫兼東宮
學士和泉守藤原朝臣　　　　多治、
亮　源　朝　臣　　　伴、
　　　　　　　　少進藤原朝臣、

東大寺小櫃文書十市郡司解　申立賣買地券事、
合地貳區、　並在十市郡池上郷、
一區地參段、在扳倉壹字扳屋參字、
（東限朱雀路、南即廣長口分田、西溝并小道、北車持朝臣仲智地、）
右左京七條二坊戸主息長丹生真人廣長貢地者、
一區地肆段、在草背屋壹字、（東限朱雀路、南息長真人廣長地、西溝小道并十市郡池上郷忍海連力士家、北十市郡池上郷小赤臣真人口分田、）充價錢仟文、

右右京五條二坊戸主正八位上車持朝臣若足戸口從五
位下車持朝臣仲智沽地者、
以前得廣長等辭状偁、絶上件地常根沽与東大寺布施屋地已
訖、望請依式欲立券文者、郡矣勘問得實、仍勒沽買兩人署名、立
券如件以解、
天平寶字五年十一月廿七日、
息長丹生真人廣長、
相知僧勝緯、
車持朝臣仲智、
知事紀朝臣形麻呂、
買寺三綱都維那僧承天、
上座法師安寛、
佐官兼寺主法師平榮、

可信法師法正、
寺使坤官官舎人少初位下衣縫牛甘、
郡司擬大領外正七位下忍海連法麻呂、
擬主帳无位大伴大田、
國判立券參通、（一通留國、一通置寺家、一通置郡、）
天平神護元年八月十六日、　正七位下行大目馬毗登夷人、
從五位下行介息長丹生真人大国、　正七位上行少掾掃守田毗登馬養、

同

綱　牒東大寺別當三綱
与相換地事、
多治比真人弟笠家地一町、在平城京佐保河邊、
東大寺地一町、（在山城国相樂郡蠏幡鄉、）
牒、治部少丞多治比真人弟笠狀之、件地可相換狀、先日專對彼寺別當陳訖已畢、今望綱驗陳於彼寺、必欲相換者、今量所請各得便宜、不可不牒、寺宜承知、早与處分、今以狀故牒、
延暦廿三年六月十日、　從儀師岡豐、
律師勝虞、　威儀師忠智、
律師惠雲、　威儀師光厚、
律師如寶、　威儀師聞珠、

相換地記、
地貳町伯貳拾捌步、（熟地七段、常荒地一町三段百廿八步、）
右造東大寺地、在山城國相樂郡蠏幡鄉、
家地壹町貳段伯貳拾肆步、（五丈草葺屋壹間、）
右從三位紀朝臣勝長、在平城左京二條五坊七町、
以前地家各有便宜、仍相換如件、
上座滿位僧壽堅、　延暦廿三年六月廿日、

東京圖書館

寺主法師位暇、　都維那位僧伍淨、
知事大法師位實忠、
知事法師位道應、
知事法師位安禎、
知事滿位僧藥上、
知事住位僧肆現、
別當大法師位修哲、
叅議從三位行左兵衛督兼造東寺長官紀朝臣勝長、
僧綱依請、
律師傳燈大法師位勝雲、　威儀師傳燈法師位慈晧、
律師傳燈大法師位、　威儀師修行法師位光厚、
律師傳燈大法師位如寶、　權威儀師傳燈法師位聞珠、
勅旨梨原莊、

勘件家地、不入應開田之限、
撿校鑄錢長官從五位下田口朝臣息繼、
大和國司、
覆撿知實、
叅議正四位下行春宮大夫兼近衛中將式部大輔守藤原朝臣、　正六位下行大掾安倍朝臣諸根、
從五位下行介勳七等笠朝臣、　正六位上行少掾釆女朝臣、
大初位上守大目大枝朝臣弥成、
少初位下守少目勳七等大伴宿祢眞長、
山城國司、
覆撿知實、
叅議右衞士督從四位下兼行守藤原朝臣、　正六位上行掾紀朝臣河守、
外從五位下行介勳七等津宿祢源、　正六位上行大目日下部宿祢、
從六位下行少目笠朝臣長名、

ガラス使用

正八位上行權少目鳥部連、

二通（一通送家、副圖附使治部史生大石豊主、一通寺家留、）

延暦廿三年春夏季帳相替狀勘注付了、

左京二條五坊七町開發七段餘、

依東大寺地除帳既了

知事一番書生日置奥山、

添上郡擬主帳評家貞、

大同四年六月六日、

造東大寺所使布師千尋、

讀申案主安曇 年人、

判収、

知事安禎、

知事真良、

知事慈冠、

知事光榮、

修理別當實忠、

別當修哲

〔春記〕長久元年四月廿日、高倉地二戸主、件地故叅河守自算生為堅手所買得也、而件所人々有相論事、仍故守不致其沙汰、欲返與本主、而予請取彼券文、召上件為堅、請職判已了、又沙汰了、仍彼守存生之時、其券文入予手了、今依有要用、限二百石賣與行任朝臣已了、其新券加玄蕃屬伴雅兼名而已、今日其文書等、同以雅兼送彼宅入了、

〔朝野群載（二十二雜文）〕

左大辨家、

沽与地貳戸主事、

在左京五條三坊四町内、（東西拾貳丈伍尺、南北捌丈、）

ガラス使用

右件地、元者以去年閏六月比、治部丞藤原季俊手所買領也、而依有直要用、限淮米參佰石、依仰旨相副本券、所放与秦末武已畢、仍為後日、立新券文者、

應德元年四月　日、

知家事大藏史生菅野、

令右京屬中原、

別當散位源朝臣、

中右記天仁元年四月十八日、今日依日次宜、遣五條券文於土佐守盛實朝臣但馬守正盛許了、

裏書渡但馬地丈尺、七戸主、十六丈八尺、

おちくほ物語三衛門云く、古ゝハ乃さう失なぐ侍ら、まづ古大宮のいと愛しうてすみたまふ所なれば、いと惜しかりなん思給ふとかくもえ聞えおはする、まひしものをかく聞えり今殿ゝまうじ給ふよいの券ゞ領じはべんといへ、右男君券ハあるやとの給へバ、侍とたゞしかりてはべりし、

ガラス使用

卯
86
2

特別
卯
合 43
2

帝國圖書館藏

ガラス使用